

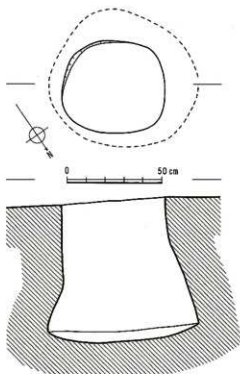
水層に達し、壁面下部は崩落のため袋状を呈する。
埋土に多少の有機物を含むほか、上層から不明板
材2枚（第54図1・2）、下層から土師質土器小皿・
皿片6個、越前焼スリ鉢片1個、礫9個などが出
土している。

20号土壙（図版第31、第55図）

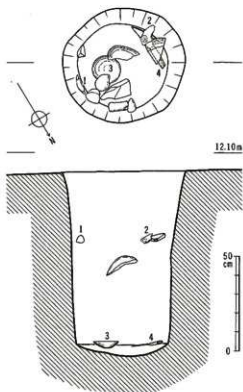
Ⅸ号遺構群の南部で、19号土壙に東接する。
円筒形の井戸である。上端の径48～55cm、下端
の径73～79cm、深さ74cmを測る。壙底は湧水層
に達し、壁面下部は崩落のため裾広がりとなっ
ている。埋土に多少の有機物を含むほか、上層から
箱材1枚、組材1本が出土している。

21号土壙（図版第31、第56図）

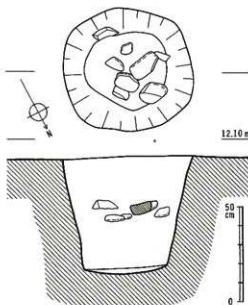
Ⅸ号遺構群の南部で、20号土壙に北接する。



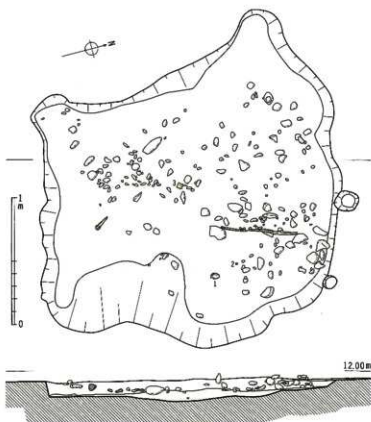
第55図 20号土壙実測図（縮尺1/20）



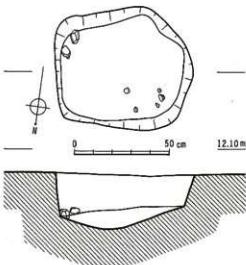
第57図 22号土壙実測図（縮尺1/20）



第56図 21号土壙実測図（縮尺1/20）



第58図 23号土坑実測図(縮尺1/30)



第59図 24号土坑実測図(縮尺1/20)

下部がしだいにすぼまる円筒形の土坑である。上端の径64～68cm、下端の径41～44cm、深さ62cmを測る。坑底は湧水層に達しておらず、壁面下部の崩落もない。埋土に多少の有機物を含むほか、中層から礫8個が出土している。

22号土坑(図版第31、第57図)

Ⅸ号遺構群の南部で、21号土坑に北接する。円筒形の土坑である。上端の径61～65cm、下端の径46～48cm、深さ97cmを測る。坑底は湧水層に達するが、壁面下部の崩落はない。埋土に多少の有機物を含むほか、中層から漆器蓋片(第57図1)・同碗片(同図

2)各1個、礫8個が、坑底から漆器碗1個(同図3)、庖丁1本(同図4)が出土している。

23号土坑(図版第32、第58図)

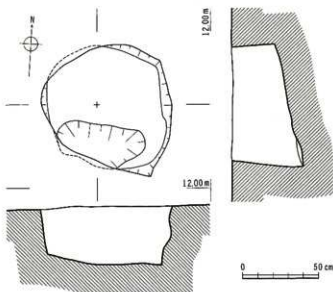
Ⅸ号遺構群の南部で、22号土坑に東接する。平面形が不整形で、浅皿状の土坑である。上端の長径約240cm、同短径約220cm、下端の長径約220cm、同短径約190cm、深さ17cmを測る。埋土に多少の有機物を含むだけではなく、土師質土器小皿片6個、越前焼葉片・同スリ鉢片各2個、瀬戸・美濃焼水注(第58図1)1個、土鈴片(同図2)・漆器碗片(同図3)各1個、棒状木器片2本のほか、小礫多数が出土している。

24号土坑（第59図）

IX号遺構群の中央部で、1号掘立柱竈に西接する。平面形が不整形形で、きわめて浅い小型土坑である。上端の長径約73cm、同短径約65cm、下端の長径約65cm、同短径約55cm、深さ29cmを測る。坑底から小礫若干が出土している。

25号土坑（図版第32、第60図）

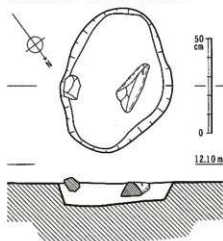
IX号遺構群の西辺中央部に位置する。本来は円筒形の土坑であるが、一部の柱状剥離で変形している。上端の径78～90cm、下端の径84～89cm、深さ47cmを測る。坑底の一部はさらに掘り込まれているが、湧水層に達していない。堀土にほとんど有機物を含まず、出土品も存在しない。



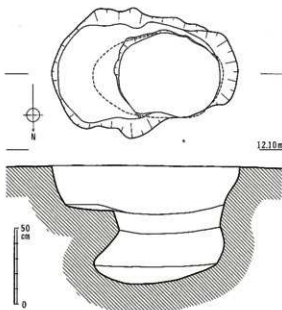
第60図 25号土坑実測図（縮尺1/25）

26号土坑（図版第33、第61図）

IX号遺構群の北部で、1・2号掘立柱竈に隣接する。平面形が不整形楕円形で、二段掘りの井戸である。上端の長径123cm、同短径86cm、下端の長径86cm、同短径56cm、深さ78cmを測る。上段の掘り込みは深さ25～30cmで、下段は上

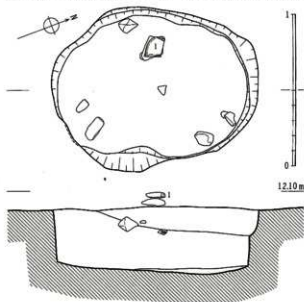


第62図 27号土坑実測図（縮尺1/20）

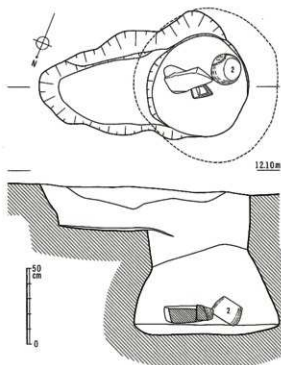


第61図 26号土坑実測図（縮尺1/25）

段の墳底の西部に穿っている。下段の墳底は湧水層に達し、壁面下部は崩落のため袋状を呈する。



第63図 28号土墳実測図（縮尺1/25）



第64図 29号土墳実測図（縮尺1/25）

埋土に多少の有機物を含むが、出土品は存在しない。

27号土墳（第62図）

Ⅸ号遺構群の北部で、1号掘立柱塀に西接する。平面形が不整楕円形で、きわめて浅い小型土墳である。上端の長径約73cm、同短径約55cm、下端の長径約73cm、同短径約50cm、深さ12cmを測る。埋土から礫2個が出土している。

28号土墳（図版第33、第63図）

Ⅸ号遺構群の北部で、1号掘立柱塀に東接する。平面形が不整楕円形で、径の割には浅い土墳である。上端の長径約136cm、同短径約109cm、下端の長径約125cm、同短径約86cm、深さ43cmを測る。埋土から礫2個が出土している。ただ、遺物の一部はより上層で出土しているので、本来の上端径や深さはもう少し大きいものと思える。墳底は湧水層に達していない。埋土にはほとんど有機物を含まず、上層から土師質土器小皿片1個、越前焼甕片2個、緑色凝灰岩製火炉蓋1個（第63図1）、礫9個などが出土している。

29号土墳（図版第34、第64図）

Ⅸ号遺構群の北部で、1号掘立柱塀に西接する。平面形が不整楕円形で、二段掘りの井戸である。上端の長径138cm、同短径82cm、下端の径95～102cm、深さ94cmを測る。上段の掘り込みは深さ25～30cmで、下段は上段の墳底の西部に穿っている。下段の墳底は湧水層に達し、壁面下部は崩落のため掘広がりとなっている。埋土に多少の有機物を含む

だけではなく、墳底から曲物容器底板片1枚、緑色凝灰岩製組合式五輪塔の水輪1基(第64図1)、礫3個などが出土している。

30号土壇(図版第34、第65図)

Ⅸ号遺構群の北部で、1号掘立柱塼に東接する。平面形が不整楕円形で、径の割には浅い土壇である。上端の長径約184cm、同短径93cm、下端の長径171cm、同短径77m、深さ44cmを測る。埋土にはほとんど有機物を含まず、礫12個が出土している。

31号土壇(図版第35、第66図)

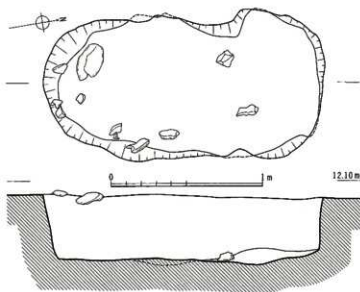
Ⅸ号遺構群の北部で、30号土壇に北接する。円筒形の土壇である。上端の径85～88cm、下端の径78～84cm、深さ48cmを測る。墳底の一部はさらに掘り込まれている。湧水層に達していない。埋土にほとんど有機物を含まず、中・下層から礫3個が出土している。

32号土壇(図版第35、第67図)

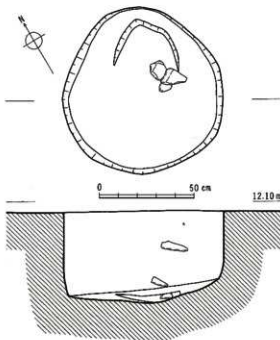
Ⅸ号遺構群の北部で、31号土壇に東接する。円筒形の土壇である。上端の径79～86cm、下端の径69～76cm、深さ97cmを測る。墳底は湧水層に達するが、壁面下部の崩落はない。埋土に多少の有機物を含むほか、上層から越前焼甕片1個、不明板材(第67図1)・板材各1枚、小礫多数が出土している。

33号土壇(図版第36、第68図)

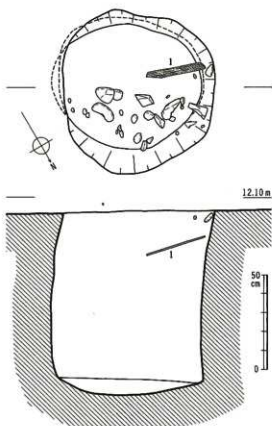
Ⅸ号遺構群の北部で、32号土壇に北接する。円筒形の井戸である。上端の径69～72cm、下端の径81～83cm、深さ94cmを測る。墳底は湧水層に達し、壁面下部は崩落のため掘広がりとなっている。



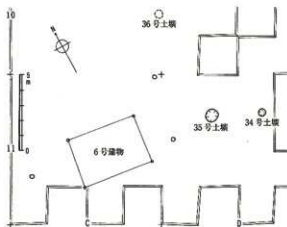
第65図 30号土壇実測図(縮尺1/25)



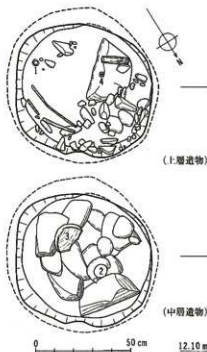
第66図 31号土壇実測図(縮尺1/20)



第 67 図 32 号土坑実測図 (縮尺 1/20)



第 69 図 X 字遺構群実測図 (縮尺 1/250)



第 68 図 33 号土坑実測図 (縮尺 1/20)

る。埋土に多くの有機物を含むだけではなく、上層から土師質土器小皿片 1 個 (第 68 図 1)、銅銭 1 枚 (同図 4)、木の枝 4 本のほか小礫多数が、中層から漆器椀 2 個 (同図 2・3) のほか大型の礫多数が、下層から青磁碗片 1 個が出土している。井戸廃棄後一時に埋め戻したものであろう。

X号遺構群（図版第37、第69図）

10C～11D区で検出。室町時代遺構群の北部に位置する。検出遺構は、掘立柱建物1棟、その他の柱穴3個、土壇3基を数える。

6号掘立柱建物（第69図）

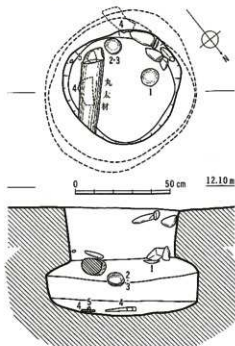
X号遺構群の西部に位置する。1間（4.65m）×1間（3.30m）の東西棟（N-80°30'-W）建物である。この建物の妻がIX号遺構群の7～10号溝や1号掘立柱塼などと平行するのは、見逃せない。

34号土壇（図版第37、第70図）

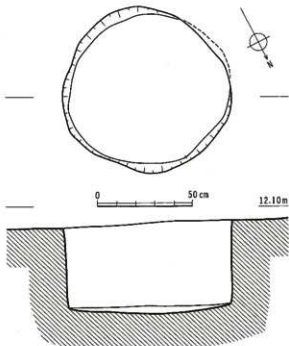
X号遺構群の東部で、建物の東方に位置する。円筒形の井戸である。上端の径60～62cm、下端の径80～88cm、深さ56cmを測る。壇底は湧水層に達し、壁面下部は崩落のため袋状を呈する。埋土に多くの有機物を含むほか、上層から礫3個が、中層から土師質土器小皿1個（第70図1）、瀬戸・美濃焼灰釉小皿2個（同図2・3）、丸太材1本、礫3個が、壇底から越前焼すり鉢片2個（同図4）、漆器蓋片1個（同図5）が出土している。

35号土壇（図版第37、第71図）

X号遺構群の東部で、建物の東方に位置する。円筒形の土壇である。上端の径88～89cm、下端の径80～85cm、深さ48cmを測る。34号土壇と同様に、他の土壇と比べてあまり深くないが、当遺跡群の周辺部は砂礫層が上位まで堆積しており、そのため本土壇も壇底は湧水層に達している。しかし、壁面下部の崩落はない。埋土に多少の有機物を含むほか、青磁碗1個が出土している。



第70図 34号土壇実測図（縮尺1/20）



第71図 35号土壇実測図（縮尺1/20）

36号土壌

X号遺構群の北部で、建物の北方に位置する。円筒形の土壌である。予備調査時のトレンチによって、その大部分が消滅していた。城底は湧水層に達するが、壁面下部の崩落はない。埋土に多少の有機物を含むが、出土品は存在しない。

37号土壌

幹線道の東端に位置する。調査区東壁直下でそのごく一端を検出しえたが、壁崩壊の恐れからそれ以上の確認を行っていない。遺構上端の形状は隅丸方形の感があるが、詳細は不明である。

(中司)

注

- ① したがって、これらの土壌の遺構群の形成いかんによっては、群の総数は10群ではなく、11あるいは12群になる。
- ② ちなみに、本遺跡に北・東接する形で、県道篠尾・出作線が通っている（図版第3）。
- ③ 井戸の防護設備としては、井戸枠・井桁・井筒・井側などの用語があるが、前三者は井戸の外部防護設備をさす用例が多く、本遺構には不適当であるので用いず、井側とする。

第Ⅳ章 遺物

第1節 遺物序説

これまでに記述してきたように、本遺跡では縄文・古墳・室町の主に3時代の遺物が検出されている。また、それ以外にも弥生・平安・江戸の各時代に属する品が若干ずつ共伴している。よって、正式には各時代ごとに分別して報告すべきかも知れない。だが、明確にその時代の遺構の存在を特定したい弥生・江戸の両時代を割愛し、それぞれ連続する古墳・室町両時代に含めることとする。すなわち、本章では縄文・古墳・平安・室町の4時代に分けて報告する。

なお、分担執筆の関係上、あえて1章を立てて全体の「調査のまとめ」を執筆することは行わない。時代ごとか執筆分担の項ごとに「小結」として簡単な考察を行い、まとめに替えたい。

第2節 遺物各説

1 縄文時代

A 概要

本遺跡の調査で出土した遺構出土の縄紋土器^②は6,003個であり、包含層出土資料が加わる。その主体は縄文時代後期中葉に位置付けられ、深鉢形土器（有紋Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類、素紋系）、壺形土器・鉢形土器（有紋Ⅳ類）、浅鉢形土器（有紋Ⅴ類）、注口土器（有紋Ⅵ類）がある。

そして、そのほか石器・石製品が総数50個ある。そのうちには、打製石斧、磨製石斧、石錘、磨石、凹石、石棒、スクレーパー、石鏃、玉などがある。

以下、それらのうち主な例について、それぞれ若干の説明を加えることとしたい。

B 遺物

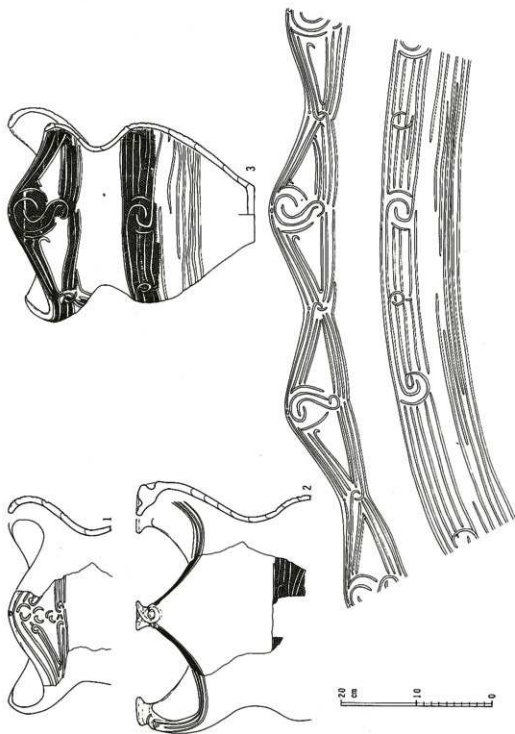
1) 縄紋土器

a 有紋土器

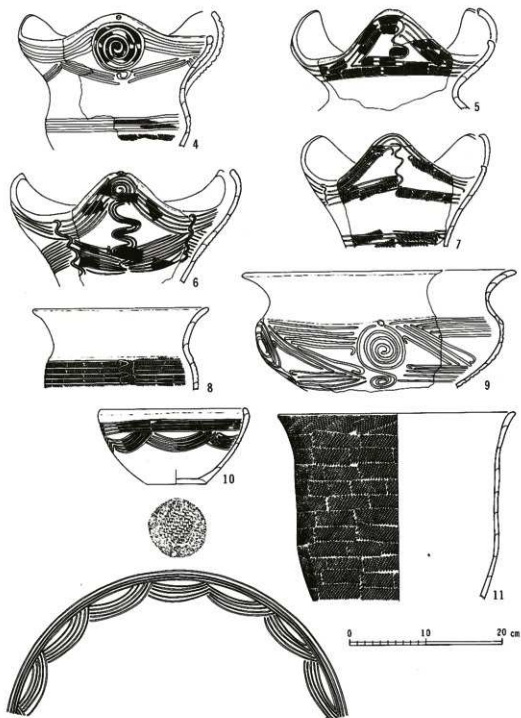
Ⅰ類（図版第38・3、第72図1・3、第73図4～7、第74図12・14、第77図44～67・73）

内罎する3単位大波状口縁の、キャリバー器形の土器を一括する。その施紋様帯は、口縁部及び胴部の二帯で構成され、頸部には無紋域を保持、大波状口縁の波底区切り紋により波頂三角区画紋を描出する。波頂紋上位には多く凹点が付され、波頂上部と波底を繋ぐ斜行帯の沈線端末が鉤状に処理される例もある。

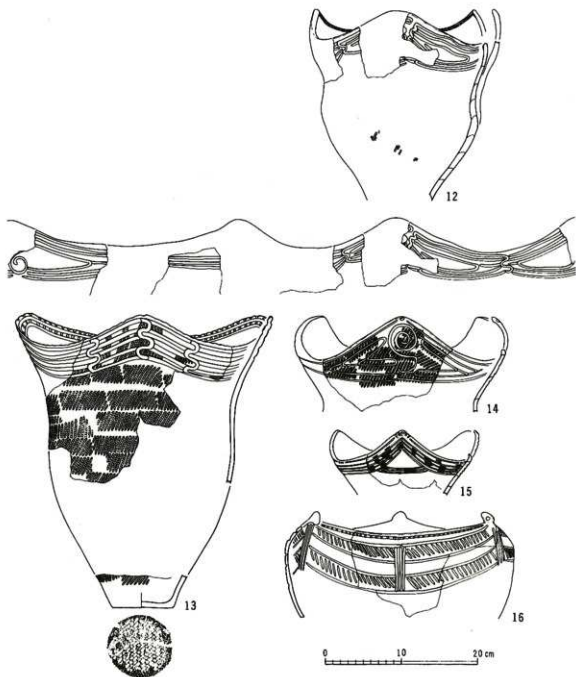
波頂紋様には、対向C字紋（第72図1）、巴S字紋（第72図3）、渦巻紋がある。渦巻紋は単線描出（第77図46・50）で、下端S字巻込（第73図4、第74図14）の例と、下位蛇行部は基線に副線（第73図6）が添えられる二様ある。（第77図47）は渦巻紋後者の下位斜行例、（第77図54）は渦巻紋が帯上位に収斂する。（第73図5・7）は蛇行単線垂下例、（第74図12、第77図60）は複列垂下例である。



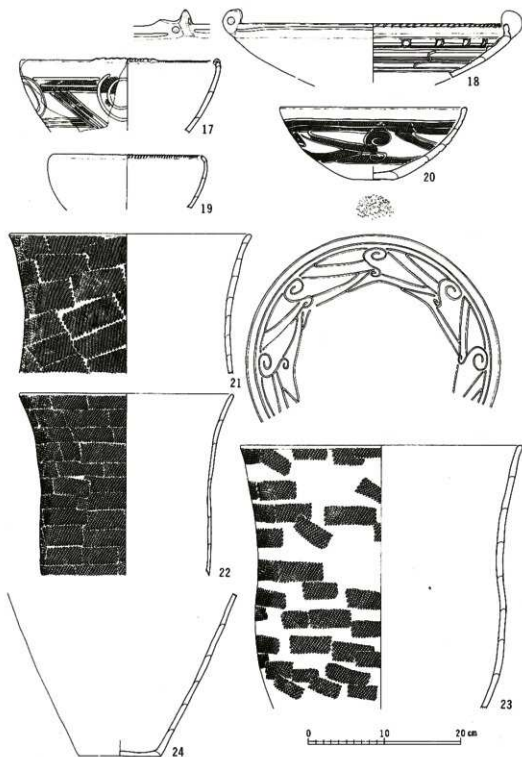
第72圖 漆文土器実測図1 (縮尺1/5)



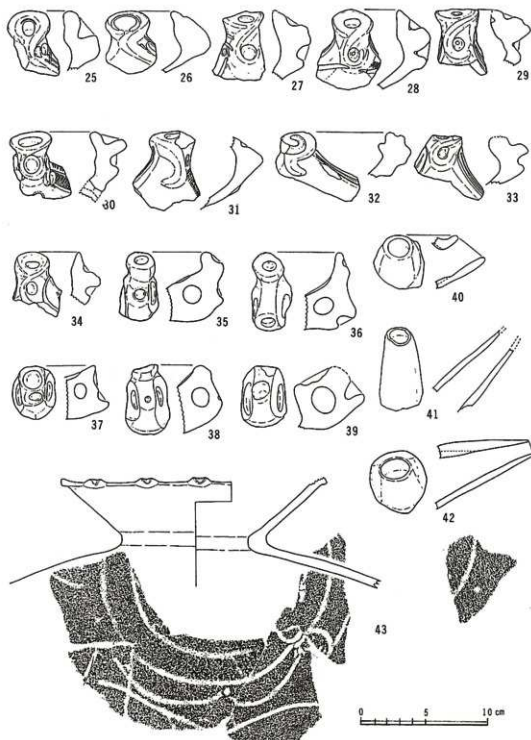
第73圖 縄文土器実測圖2 (縮尺1/5)



第74図 縄文土器実測図3 (縮尺1/5)



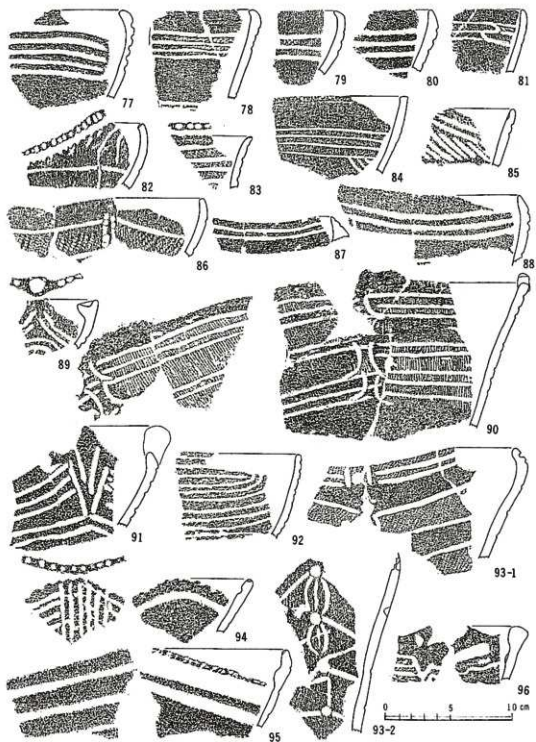
第75圖 縄文土器実測図4 (縮尺 1/5)



第76図 縄文土器実測図5 (縮尺1/3)



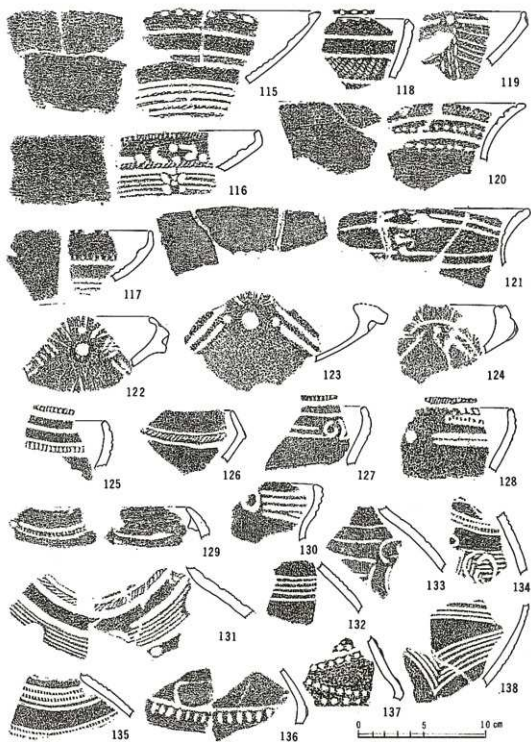
第77図 縄文土器実測図6 (縮尺1/3)



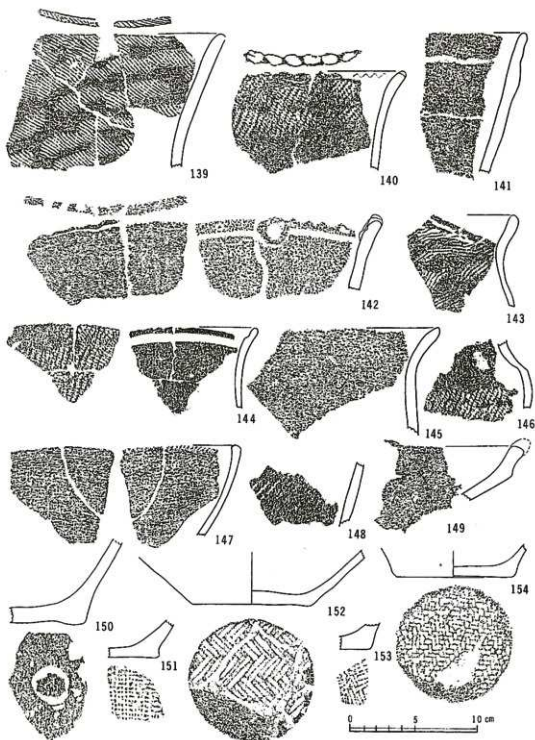
第78圖 縄文土器実測圖7 (縮尺1/3)



第79圖 縄文土器実測図8 (縮尺 1/3)



第80圖 縄文土器実測図9 (縮尺 1/3)



第81圖 縄文土器実測図10 (縮尺 1/3)

列点紋では、(第77図52)の屈曲部への施紋はⅡ類との折衷様と看做され、(第77図61・63)はⅢ類器形の可能性がある。(第77図49・53・57～59・62)のS字、「の」の字、刺突列、方形区画の各例は小形土器、(第77図65・66)の単線蛇行垂下例は塊状品とも看做される。

Ⅱ類 (第72図2、第76図25～34、第77図68～72・74～76)

口縁上位屈曲部に施紋域を有する土器を本類とする。施紋域の作出形態により3分する。

A (第77図69) 施紋域を直立気味の肥厚口縁部に保持する、所謂縁帯紋の類例とされる。

B (第72図2、第76図25～34、第77図70・71・74・75) 屈曲部施紋域を保持、(第72図2)はⅠ類同様二帯構成を成す。波頂部「8ノ字」状捺り装飾把手(第72図2、第76図25～34)、屈曲部施紋域に貼付隆部(第77図70・74・75)付加例もあり、後者の一部は酒見式と関連するか。

C (第77図68・72・76) 屈曲部の作出はシャープで、前二者に比しより後出と思量される。

Ⅲ類 (第74図13・15・16、第78図77～83・85～91・93～96)

頸部がやや括れを有したりしながらも、略バケツ状器形を呈する類である。本類は口縁部の内髯(A)、外傾(B)の態様により、2分する。

A (第74図15・16、第78図77～82・86～89・91・93) 緩やかに内髯乃至内傾する口縁を保持する。さらに本種は、口端部の作出により分類される。

A1 (第74図16、第78図77・82・86・93) 内髯する口縁で、口側から胴位、突起部へと上昇したりする横帯紋を保持する。(第74図10)は、周回する沈線内刺突列下位を巡る二帯の斜行沈線横帯の、突起位及び波底を縦位複沈線、(第78図82)は横帯を蛇行垂下線、(第78図86)は磨消縄紋帯を縦門形刺突列で区切る。(第78図93)も口側では凹点の両側に短縦沈線、胴位には上下の凹点を結ぶ短縦線を挟む対向弧線により磨消縄紋帯を区切る。同例は加曾利B1式の系譜を引くであろう。(第78図77)は方形区画内横帯沈線の例と看做され、他のA1より後出と考えられる。

A2 (第74図15、第78図78～81・89・91) 内髯する口縁端部が内屈する。(第78図78～81)は横帯紋で、(81)は蛇行線が区切る。(第78図89・91)も加曾利B1式類縁資料。(第74図15)は、波状口縁側部上位を沈線内押しで描出された横帯が巡り、波頂部で三角形に区画する。器面整形は良好。

A3 (第78図87・88) 内傾口端の先端が尖り、横帯沈線が肥厚口縁部(87)、胴側位(88)を巡る。

B (第74図13、第78図83・85・90・94～96) 外傾直行する口縁を保持、口縁側位や胴部に横帯紋が施され、口縁内面や口唇部にも施紋される例がある。(第74図13)は、口縁部波形に合わせうねる横帯紋を波動頂位で蛇行沈線が区切り、胴部には縄を施紋、(第78図83)は水平区画紋、(第78図85)は恐らくは斜行沈線による三角形区画紋の資料である。(第78図94)は波頂で多条の縦沈線が、(第78図90)は突起部下位で向きが相反する弧線が、不連続な横帯沈線を、それぞれ分断する。(第78図95・96)は、内外面施紋の加曾利B1式類縁資料である。

Ⅳ類（図版第38・8～10・20、第73図8～10、第75図17・19・20、第78図84・92、第79図114、第80図118～121）

埴形土器（図版第38・10・20、第73図10、第75図17・19・20、第78図84・92、第80図118・119）平縁の口縁が平縁で、緩く内彎する体部外面に施紋される。（第73図10）は縄紋横帯と下位の重弧線紋、（第75図7・第78図84）は横位・斜位の区面紋で構成され、（第75図20）は縄紋横帯とS字紋が矩形区面に連結され対角に分断する。（第78図92）は横長楕円紋、（第80図118）は口唇施紋の磨消縄紋横帯例で、（第80図119）は斜行帯を擬位列点で分断する。（第75図19）の器面調整は良好。

鉢形土器（図版第38・8・9、第72図8・9、第79図114、第80図120・121）

外反口縁の鉢形土器のうち、（第80図120・121）は口縁内面に沈線・列点が施される。（第73図8）は小形の例で口縁部無文、胴部の縄紋横帯を蛇行沈線が分断、（第73図9）は大形で内縁部無文、胴部に配された多重S字紋の上下両線を横位・斜位の沈線帯が連結、端末は鉤状に処理される。（第79図114）は内傾口縁で、側面に施される刺突紋は気屋式との類似性が垣間見られる。

Ⅴ類（第75図18、第80図115～117・122～124）

浅鉢形土器である。（第75図18、第80図115～117）は平縁で、内面に微隆帯間の円紋や横帯沈線を蛇行線や列点で分断する紋様を保持、（第75図18）には裝飾把手も付加される。凡そ加曾利B式系とされよう。（第80図122～124）は波状口縁で、口縁上位の肥厚乃至屈曲部外面を施紋域とする。

Ⅵ類（第76図35～43、第80図125～138）

注口土器である。（第76図43）は大型の注口土器と思われ、擬口縁に於ける押圧紋は尚上位に連続しよう。肩部には凹点やC字紋を起点とした対向弧線紋が施される。（第80図125～138）は口縁部片で、（125・127・138）は上端部刻み、（126）の屈曲部に施紋域、（129）は内面に受け部を保持する。（第76図35～39）は把手、（第76図40～42）は注口部、（第80図131～138）は身部片である。（131・134・135）は加曾利B式系施紋様と思われ、（136）には肩部隆帯刻み、（138）は胴下半部位と目される。（137）は皮袋状土器やも知れない。

胴部片（第79図97～113）

胴部片について一括する。（97・100）は横走沈線的一端と渦巻の沈線が連続し、（98・101）は上下の渦巻が連接する。（107・108）は胴部紋様帯上位の稜が明瞭で、（108）の縄紋帯を下位捲込の巴紋が分断する。これらは、凡そⅠ類に含まれよう。

（102～104）は蛇行線紋で、（102）は単線、（103）は基線を副線が包み、（104）は複列と看做される。（111～113）は掘縄紋で、就中（111）には塗彩も認められる。（99・106・110）はⅢ類器形で、（109）はⅣ類に包括、（109）の横帯には交互区切紋が施され、加曾利B1式系と看做される。（105）は後出であろうか。

b 素紋系土器（図版第38・11・24、第73図11、第75図21～24、第81図139～154）

縄紋土器（図版第38～11、第73図11、第75図21～23、第81図139・140・143・144・146・148）器形の主体は朝顔形を呈し、多くは大形品である。器壁外側には縄紋が施され、（第73図11、第75図21・22）は密接施紋、（第75図23、第81図139・140・148）では施紋単位が識別される。（第81図144）は口縁部内紋をも併せて保持し、（第81図143・146）は小形品である。（第81図139・140）は口唇にも加飾を有している。

無紋土器（図版第38～24、第75図24、第81図141・142・145・147・149）器壁外側が無紋で、（141）は直行外傾、（142・145）は外反口縁で、（142）には内紋と口唇にも加飾される。（147）は埴形の、（149）は浅皿状の後出例とされよう。

底部片（第81図150～154）立ち上がり角は多様で、網代痕などが認められる例もある。

C 小結

本遺跡出土縄紋土器の主体を占めるのは、北陸の編年大綱が定まった『能登』^②に於いて、「気屋／万行」以降が空白期とされた後期のうち、凡そ中葉と目される酒見式期やその前段階頃に位置しよう。

有紋土器Ⅰ類の3波状口縁は、加曾利B1式の3単位突起深鉢の系統に由来、内彎と括れの態様により変遷する。また波頂部紋様は、渦巻紋の収縮・上昇により上位凹点の位置が変化し、渦巻下端は解れて蛇行線化、描出線は単線から複線・複列化する。波頂三角区画紋の区画沈線は3本から上部回線付加・多条化傾向が覗え、区画沈線端末処理は鉤状処理から形骸化へ、併せ横帯末端は閉塞処理される例も出現、波頂三角区画紋の下位区画は分断・平行から喰い違ふ。

この変遷観が是とされるなら、Ⅰ類に於いて1〔第73図4〕－2〔第72図1・3、第74図14〕－3〔第73図5～7〕－4〔第74図12〕の4階梯を設定出来よう。更に、Ⅲ類A2とした（第74図15）の収縮・上昇した三角形区画、Bとした（第74図13）の複列蛇行線は、共に4〔第74図12〕に併行する。Ⅳ類鉢形土器（第73図9）の多重S字紋は1〔第73図4〕、埴形土器（第75図20）は2〔第72図3〕の単線S字紋の平縁化、（第73図10）の重弧線紋は3〔第73図6〕の多条化と看做せる。

予てⅠ類は、京都府桑飼下遺跡^③「深鉢5」との類似が着目され、紋様及び帯構成をして、所謂緑帯文土器の展開・発展形態と認識された。然り乍ら、波頂紋の上下への伸長や口縁内彎度を詳細に弁別すれば、桑飼下遺跡「深鉢5」と曾万布遺跡有紋土器Ⅰ類土器の保有する時間幅は等質とはならず、「桑飼下式」と提唱された資料は加曾利B1式と接触して、曾万布遺跡の古段階に比定されることになる。一方、胴部紋様帯上位に観察される段は、同様の部位に施される擬縄紋の存在をも併せ、一乗寺K式関連資料と看做されよう。

その他類品との比較では、石川県横北遺跡^④昭和31年出土例に、渦巻きと蛇行沈線の併用例がある。また、福井県鹿谷本郷遺跡^⑤の蛇行沈線例は、工具による複線化、基線左右の各片方に副線を添え、逆「の」の字紋が波状口縁側斜行帯下に添付例も見られる。後者の例について、同遺跡の伴出資料を勘案するならば、酒見式に関連する段階へと下降する可能性が生じよう。

これらⅠ類に設定する階梯を基に、遺構の帰属時期を順に推定、4号（第72図2）・7号（古）（第

73図4・9) - 2号(第72図1)・1号(第72図3) - 7号(新)(第73図5 ~ 8・10) と導けることとなる。

(木下)

2) 石製品・土製品

a 遺構出土の石器(図版第39 - 3、第82図1 ~ 8)

1号遺構からは打製石斧1点(第82図5)が出土し、6号遺構から打製石斧3点・磨製石斧1点・磨石1点(図版第41 - 3、第82図2 ~ 4、6・8)が出土した。7号遺構からは2次加工のある剥片1点、石皿1点(第82図7)が出土した。

1は2次加工のある剥片で表面に自然面を残す幅広い剥片を横位に利用している。右側辺には打面調整の剥離がみえ、左側辺には微細な刃潰れがみられ2次加工のある剥片とした。2は磨製石斧で刃部は両刃で基部は剥片面を残し、基端は良く磨かれている。3 ~ 6の4点は打製石斧で、3、4は短冊形の打製石斧で3は半分以上を欠損する。4は基部の一部を欠いている。5・6は撥形の打製石斧で共に表面に自然面を残し、切断面を右側辺に大きく残しているのが特徴的である。5はその切断面を打面として表裏に調整剥離が施されている。6は切断面をそのまま利用し、調整が少ないものである。7は石皿で1/2以上を欠損する。かなり使い込んであり窪んでいる。8は円形の磨石である。以上の8点が遺構から出土した。

b 包含層出土の石器(図版第41、第83 ~ 86図)

打製石斧(図版第39 - 9 ~ 23、第83図9 ~ 16、第84図17 ~ 23)

16点が出土し、9 ~ 13の5点が撥形を呈する打製石斧である。刃部は9・11が丸刃形で、10・12は偏丸刃形、10が平刃形と言えよう。側縁形状も凸状のもの、凹状になるもの、直線状になるものの組み合わせによる。9は両側縁共に凸状のものである。11は共に直線状である。11は直線と凹状のものとの組み合わせである。12・13は凹状のもの凸状のものとの組み合わせである。撥形打製石斧は側縁形状の組み合わせにバリエーションがみられる。14 ~ 23の10点が短冊形を呈する打製石斧である。完形品は14 ~ 16、23の4点のみで、17 ~ 22の6点は欠損品である。17・18は基部を僅かに欠損する。その他は1/2前後を大きく欠損している。短冊形打製石斧の方が撥形打製石斧より欠損率が高いと言えよう。23は短冊形打製石斧の基部が調整され、魚の尾尻のような形状を呈する。つまり基端とその側縁の三方から調整され、三方がくびれ状になり、大型のものである。

磨製石斧(第84図24)

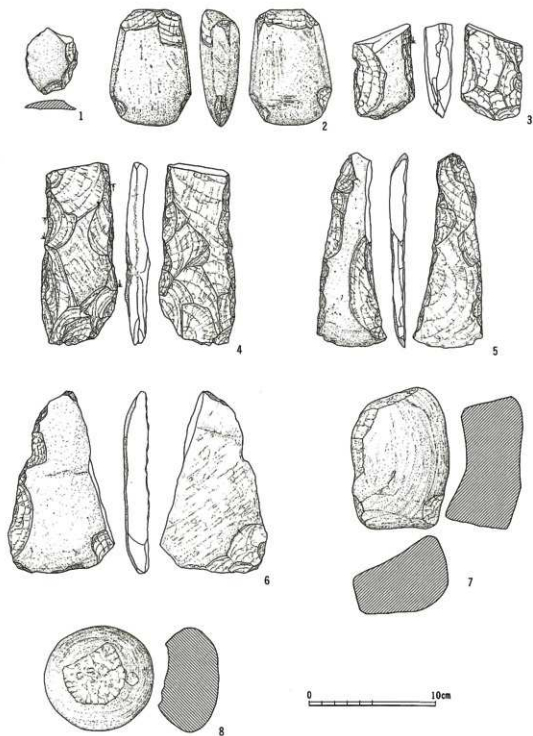
基部および刃部の一部を欠損する蛤刃の磨製石斧である。

石鍬(第84図25・26)

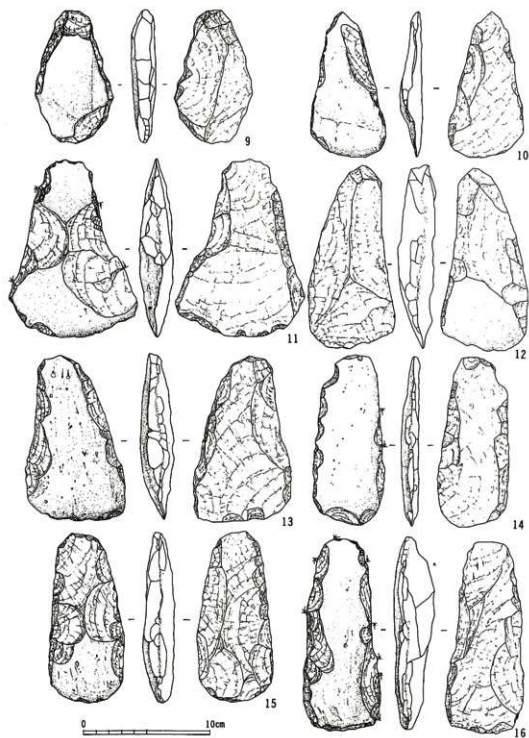
扁平な板状の素材を利用し、周辺部に細かな調整が施されている。横刃状のものか。

石錘(図版第39 - 27 ~ 36、第85図27 ~ 36)

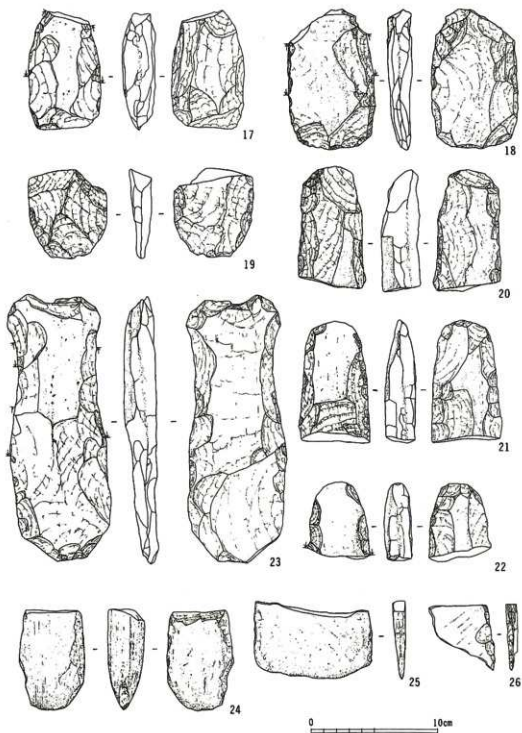
石錘はその錘の紐掛けする環の上下の部分に刻みを付けている。その部分を擦り切りによって刻みを付ける切目石錘(第85図27 ~ 30)と打撃による剥離によって刻みが付けられる打欠石錘(第85図31 ~ 36)とがある。重量をみると切目石錘は27の45.2 gから29の95.2 gの間におさまる。一方、



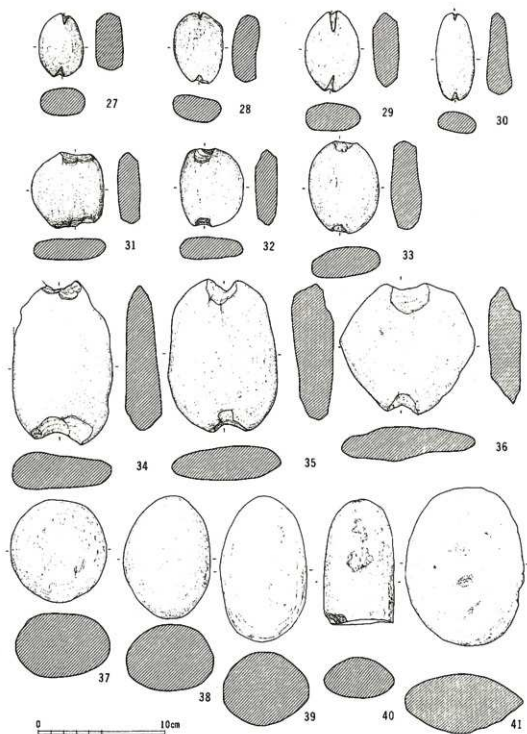
第82図 遺構出土石器実測図(縮尺1/3) 剥片(1) 磨製石斧(2) 打製石斧(3~6) 石皿(7) 磨石(8)



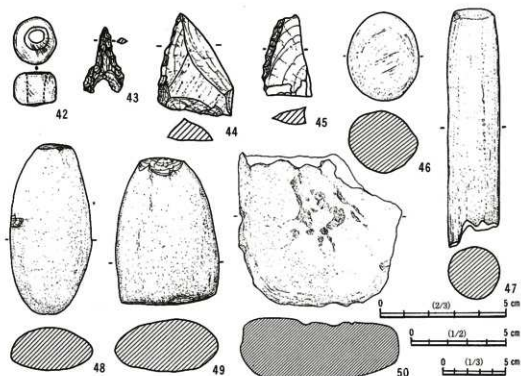
第83圖 包含層出土石器実測圖1 (縮尺1/3) 打製石斧 (9～16)



第84図 包含層出土石器実測図2 (縮尺1/3) 打製石斧 (17～23) 磨製石斧 (24) 石鐮 (25・26)



第85図 包含層出土石器実測図3 (縮尺1/3) 石錘 (27～36) 磨石 (37～41)



第86図 包含層出土石器実測図4 (縮尺2/3: 42~45、1/2: 46~49、1/3: 50) 玉垂飾 (42) 石鏃 (43) 削器 (44・45) 磨石 (46・48~50) 石棒 (47)

打欠石鏃は31の50.8 gから33の138 gの一群と36の350 gから35の432 gの一群がある。打欠による石鏃の方がより多様な紐や網に対応が可能であるからである。

磨石類 (第85図37~41、第86図46・48・49・50)

磨石類は礫の表面部分に磨き痕、凹み痕、敲き痕がみられるもので、その組み合わせで構成される。形状にもバラエティがみられる。

玉垂飾 (第86図42)

円形に孔を穿孔したもので、断面は隅丸方形で浅い管玉状になる。

石鏃 (第86図43)

三脚状の凹基鏃である。1点のみ出土する。

削器 (第86図44・45)

三角形を呈し、その一辺に調整剥離を施し、刃部としている。

石棒 (第86図47)

頭部を欠損する棒状のものである。

c 包含層出土の土製品 (第87図1)



第87図 土製品実測図 (縮尺1/2)

1は土偶の一部で脚部と思われる。表裏に2条の沈線が施されている。

断面は円形である。

(松井)

注

- ① 「縄(紋/文)(式)土器」、「(紋/文)様」等に関する用字・用語法については、当該土器の時代性及び学史的経緯、また字源上の観点から、種々の意見がある。然り乍ら、学術的な概念定義を志向する上で、本報告に於いては当該遺物の観察記載の項に限定して、「縄紋土器」の語彙を用い、用字の使い分けによる混乱を防ぐために、「紋様」等についても統一して解説することにする。
- ② 高堀勝喜 1955 「先史文化」『能登——自然・文化・社会——』 平凡社。
- ③ 渡辺 誠編 1975 『京都府舞鶴市桑畑下遺跡発掘調査報告書』 平安博物館。
- ④ 湯尻修平編 1977 『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会・石川考古学研究会。
- ⑤ 中司照世編 1977 『鹿谷本郷遺跡』 勝山市埋蔵文化財調査報告第1集 勝山市教育委員会。

2 古墳時代

A 概要

古墳時代の出土品としては、土器類・木器類と石製品・土製品・植物質加工品、自然木・植物種子などの類がある。それらのうち主要な品は、その大部分が大溝・河道・低湿地などから出土している。以下、主要な品を各遺構ごとに説明する。なお、土師器以外にもかなりの量の弥生土器片も混在しているが、既述のとおり本節に含めて報告することとする。

B 遺物

1) 土師器類

土器類では、土師器片総数33,196個、須恵器片2個を数える。そのうち、土師器の各遺構や各地区ごとの出土数は、第2表のとおりである。中でも、大溝と低湿地からの出土数が特に多く、全個数の7割近くに達する。また、無遺構の調査区の内10区ではその出土数が目立っている。これは、河道に南接する個所からの出土である。

なお、第2表は全て検出破片数で集計したものである。予備調査時の出土品は、表中ではトレンチ出土と列挙しているけれども、文中では全て本調査時の地区に直して説明する。また、紙幅の関係からできる限り簡略に記述したい。

a 竪穴住居出土土器（図版第40、第88図）

竪穴住居では、若干の個体数の土師器の遺存が見られた（第18図）。それらは、甕4個（第88図1～4）、釜1個（同図5）、壺3個（同図6～8）、高坏2個（同図9・10）である。甕や壺は、いずれも小さい平底を呈する。

甕は、いずれも頸部内面に稜を形作って「く」の字状に外上方に外反する口縁部をもつ。大型品3個（同図2～4）と小型品1個（同図1）からなる。2は容量6.5Lである。

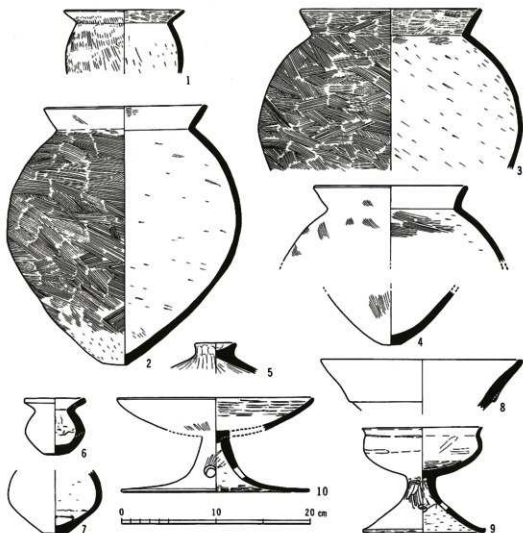
壺は、それぞれ形が異なり、口縁部外面に粘土を貼り付け稜を作り出した大型品（同図8）、口縁部を欠く小型品（同図7）、ミニチュア品（同図6）の各1個からなる。ミニチュア品は容量0.04Lである。

高坏は、頸部内面に弱い稜を形作って「く」の字状に外上方に短く外反する口縁部をもつ坏部をそなえるもの（同図9）と、緩やかに内湾しながら外上方に大きく開く口縁部をもつ坏部をそなえるもの（同図10）とがある。前者は容量0.4L、後者は0.7Lである。

第2表 出土遺構・地区別土師器片一覧表

遺構名	個数 (%)	遺構名	個数 (%)	遺構名	個数 (%)
竪穴住居	763 (23)	10 区	2,068 (62)	21 区	264 (0.8)
大 溝	13,677 (41.2)	16 区	432 (1.3)	23 区	24 (0.1)
河 道	821 (2.5)	17 区	950 (2.9)	トレンチ	1,935 (5.8)
低 湿 地	8,634 (26.0)	19 区	4 (-)	無 記 名	935 (2.8)
産 地	2,678 (8.1)	20 区	11 (-)	総 計	33,196 (100)

(ただし、定形土器についても破片数を表示している)



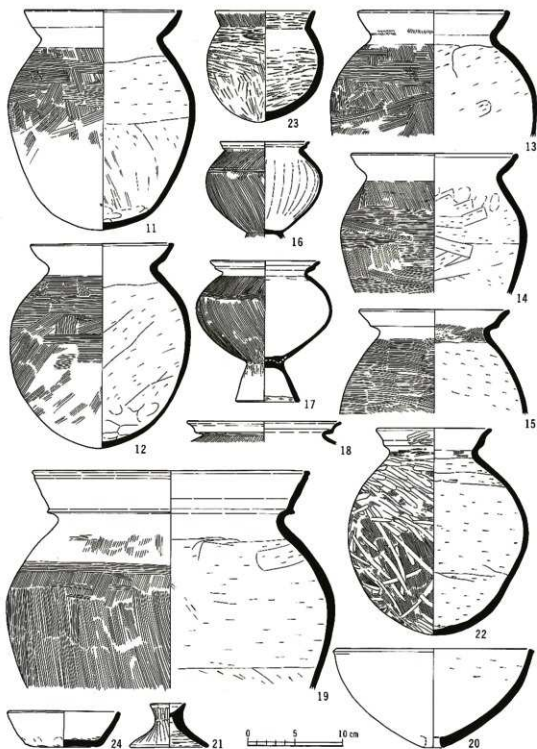
第88図 聖穴住居出土土器実測図（縮尺1/4）

b 大溝出土土器（図版第41～43、第89～93図）

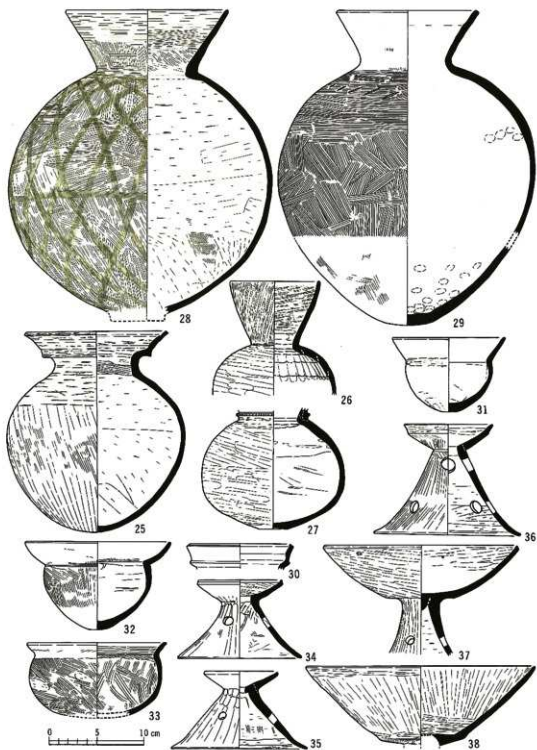
上述のように、大溝出土の土器数はきわめて多く、全個数の41%を占める。

本遺構の埋土は、下層・中層・上層の3層に大別しうる。第Ⅲ章の遺構で記述したが、下・中・上の各層はさらにそれぞれ各4～5の土層に分けられる。ただし、全ての品の出土層位が特定するわけではないので、属する層位は大別した3層で示している。いずれにしても、上層からもかなりの個数が出土しているけれども、溝底を含む下層（第19・20図）や中層からの出土がきわめて多い。

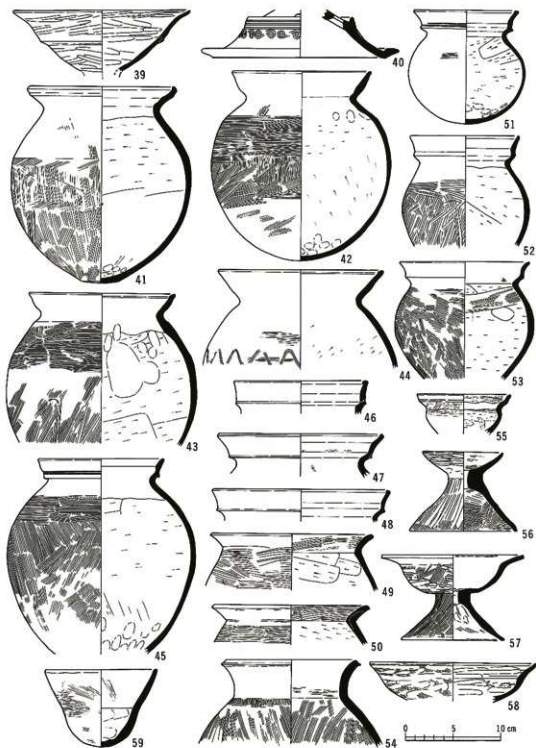
溝底を含む下層からの出土品（第89～91図）には、全形の判明する完形の例が多い。



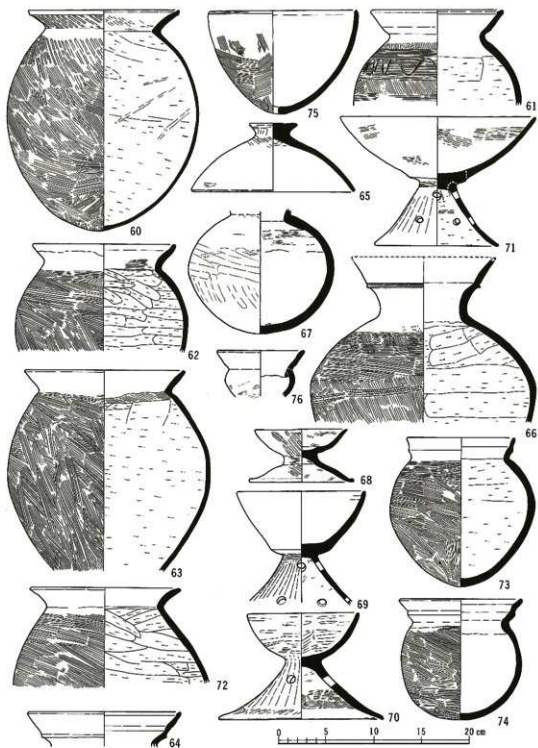
第89圖 大湊出土土師器実測図1 (縮尺1/4) 下層 (11~24)



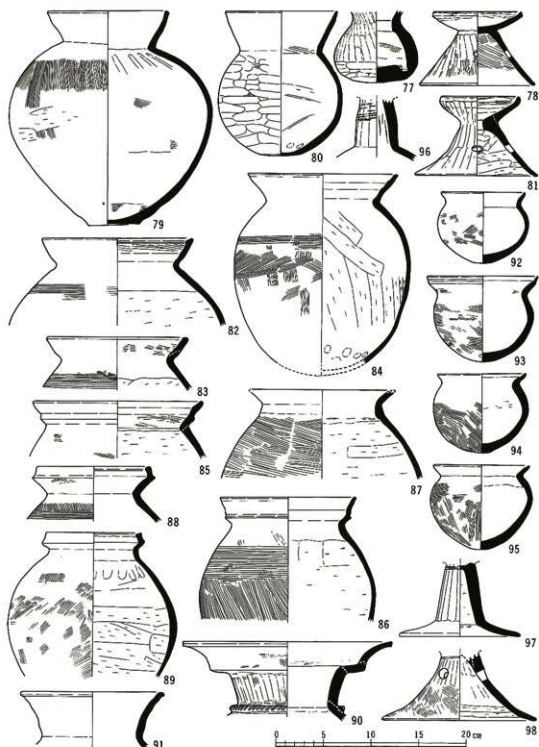
第90圖 大溝出土土師器実測圖2 (縮尺1/4) 下層 (25~38)



第91圖 大溝出土土師器実測図3 (縮尺1/4) 下層 (39・40) 下層～中層 (41～58) 中層 (59)



第92圖 大溝出土土師器実測図4（縮尺1/4） 中層（60～76）



第93圖 大溝出土土師器実測図5 (縮尺1/4) 中層 (77~81) 上層 (82~96) 表土 (97・98)

甕には、内湾ぎみに外上方に立ち上がり、内端部が肥厚する口縁部をもつもの（第89図11～14）や、断面が「S」の字状に屈曲して外上方に短く外反する口縁部をもつもの（同図16～18）、外面に稜を形作って外上方に立ち上がりそのまま終わる口縁部をもつもの（同図15）か、内外両端部が肥厚する口縁部をもつもの（同図19）などがある。これは、下層のみならず中～上層でも同様であるが、内端部が肥厚する口縁部をもつ中型甕（容量3.0～3.8L）が多例を占める。いわゆるS字状口縁甕では、小型の16は容量0.6L、同じく17は0.8Lである。

有孔鉢には、内湾しながら外上方に立ち上がり、大口径の口縁部をもつもの（同図20）がある。容量は1.3Lである。

蓋には、緩やかに外湾しながら短く外下方に延びる口縁部をもつ小型のもの（同図21）がある。

壺には、直線的に外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（第90図28・29）や、外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（第89図22、第90図25）、やや扁平な体部に外上方に立ち上がる細長い口縁部をもつもの（第90図26・27）などがある。最初の一群は大型品であり、28はいわゆる「龍目土器」で容量9.6L、29は8.1Lである。次が中型品で、22は容量2.9L、25は2.8Lである。最後が小型品で、27は容量1.2Lである。

碗は、頸部内面に稜を形作って「く」の字状に外上方に立ち上がる口縁部をもつが、口縁部が直線的なもの（同図31・33）と内湾するもの（同図32）とがある。また、坏ともいふべき大きい平底のもの（第89図24）がある。24・31は容量0.2L、33は0.7L、32は0.4Lである。

器台には、緩やかに外反しながら外下方に延びる脚部に、内湾気味に外上方に立ち上がる器受部をもつ小型品（第90図34～36）と、坏底部から外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつ高坏形のより大型品（第91図39）がある。前者の一部は器受部外端部に幅狭の面をもつ。

高坏には、坏底部から外面に稜を形作って内湾ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（第90図37・38）がある。37は容量1.0L、38は1.5Lである。

下層～中層や中層の出土品（第91～93図）も同様であるが、甕には口縁端部が肥厚するか平坦面をもつもの（第91図41～44、第92図61）が目立つ。また、頸部内面に稜を形作って「く」の字状に外上方に外反する口縁部をもつもの（第91図49・50、第92図62・63・72）や、外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がり、内端部が肥厚する口縁部をもつもの（第91図46～48、第92図64）、体部外面に叩目をもち口縁端部が上に肥厚するもの（第92図60）、も混在している。以上の品はいずれも中型品であるが、外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がり、その一部には内端部が肥厚する口縁部をもつ小型品（第91図51～53、第92図73・74）もある。中型品の41は容量2.8L、42は2.4L、60は4.2L、小型品の73は1.3L、74は0.7Lである。

有孔鉢には、内湾しながら外上方に立ち上がり、下層出土の品より小さい口縁部をもつもの（第92図75）がある。容量は1.1Lである。

蓋には、緩やかに内湾しながら外下方に延びる口縁部をもつやや大型のもの（同図65）がある。

内外面とも丹塗りである。

壺には、外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（同図66）や、頸部内面に稜を形作って内湾ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（第93図79）、同様な小型のもの（同図80）、扁平な体部に外上方に立ち上がる細長い口縁部をもつもの（第92図67）、いわゆる小型九底壺（同図76）などがある。79は容量3.5L、80は0.8L、67は1.0Lである。なお、67の体部外面の中位には煤の付着が全周する。

器台には、緩やかに外反しながら外下方に延びる脚部に、内湾気味に外上方に立ち上がる器受部をもつ小型のもの（第91図56）や、坯底部から内面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつ高環形のもの（同図57・58）、鼓形の小型のもの（第92図68）がある。

高環には、坯底部から外面に稜を形作って大きく開きながら内湾ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（同図71）や、外面の稜の有無には差があるが小型の塊形をなす坏部をもつもの（同図69・70）がある。69は容量0.4L、70は0.3Lである。

表土層を含む上層では、甕では既出のものと同様に、口縁端部が肥厚するか平坦面をもつもの（第93図82～84）、「く」の字状に外上方に外反する口縁部をもつもの（同図87）、外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（同図85・86）がある。84は容量3.0Lである。

壺では、外面に稜を形作って大きく外反しながら外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（同図90）、外面に稜を形作って内上方に短く立ち上がって口縁端部が肥厚するもの（同図88・89）がある。

碗では、内面に稜を形作って「く」の字状に外上方に短く立ち上がる口縁部をもつもの（同図92～95）がある。92は容量0.2L、93～95はいずれも0.3Lである。

高環では、柱状の脚筒部から急に屈曲して外下方に広がる脚裾部をもつもの（同図96・97）と、緩やかにしだいに広がる脚裾部をもつもの（同図98）とがある。

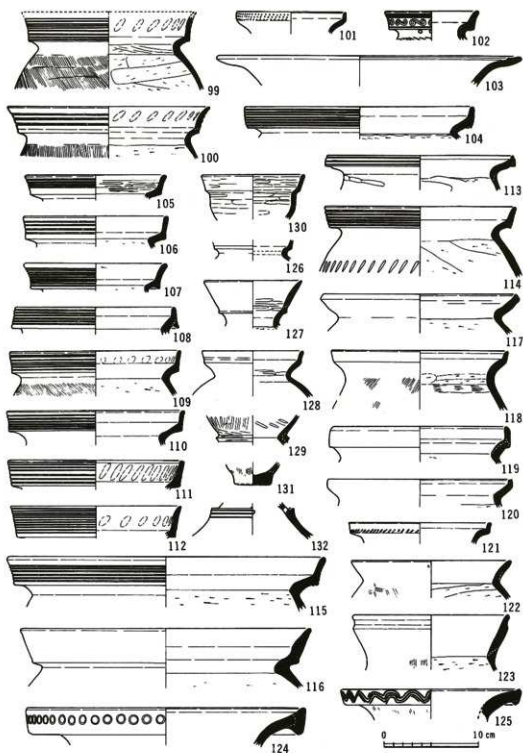
c 河道出土土器（第94・95図）

河道はかなりの流量の水流があったためか、遺構の規模の大きさの割には土器の出土数は少なく、わずかに全個数の2.5%を占めるに過ぎない。しかも、その大部分が河底や下層からの出土である。

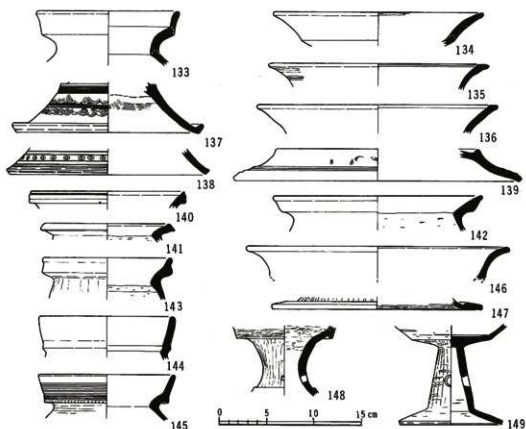
以下、河底ならびに下層出土品と、黒色土層ならびに表土層下出土品に9D区南端出土品を含めたものとの二つに分けて記述する。

河底を含む下層からの出土品（第94・95図）は、いずれも断片である。

甕には、外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がる口縁部もち、その外面に3～11条の擬凹線文を巡らすもの（第94図99・100、104～115）の存在が顕著である。ただ、口縁部の端部が薄くなる品（同図99・100、112）も一部混じるが、端部が厚いままで終わる品（同図104～111・115）が過半を占めている。そのほか、口縁部外面が無文のもの（同図116・119）や口縁端部を直立させて幅狭の垂直面を作るもの（同図118・120）、同じ垂直面に連続斜行刺突文を施すもの（同図121）などがある。



第94圖 河道出上土師器実測圖1 (縮尺 1/4) 河底 (99～103) 下層 (104～132)

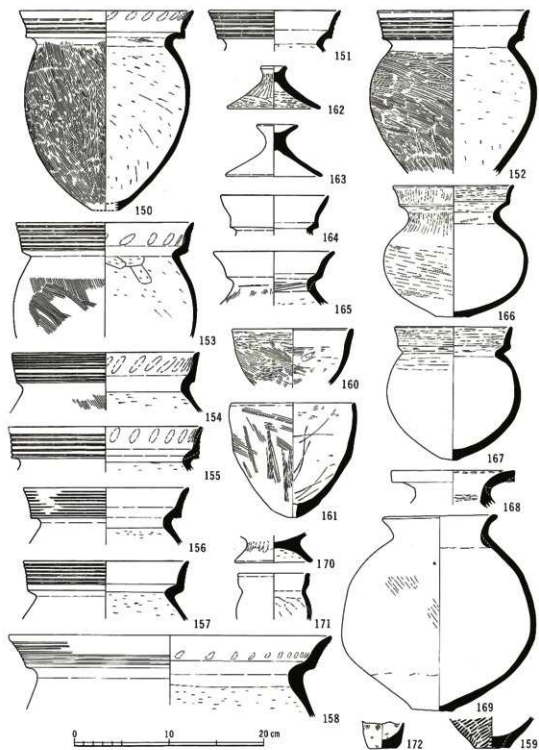


第95図 河道出土土師器実測図2（縮尺1/4） 下層（133～139）9D区南端（140～147）
黒色上層（148）表土層下（149）

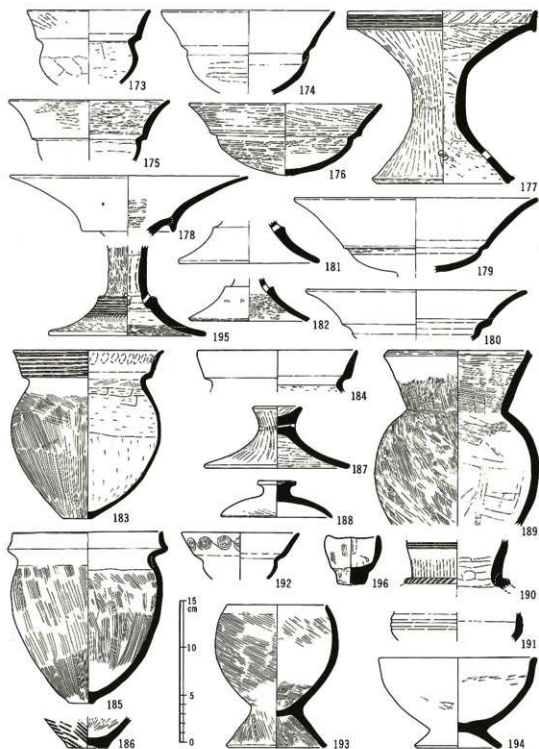
甕には、緩やかに外反しながら外上方に立ち上がって口縁端部に幅広の垂直面を作り、その外面に連続竹管文や櫛描波状文を施すもの（同図124・125）や、外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（第95図133）など大・中型品と、外面に稜を形作って外上方に立ち上がる口縁部をもち、その外面に擬凹線文を巡らしその中間に連続する「S」字状文を充填するもの（第94図102）や無文のもの（同図126～128）など小型品がある。

高坏は、緩やかに外反しながら外上方に立ち上がり、内端面を肥厚させた坏部をもつもの（同図103、第95図135・136）がある。一方脚部は、外反ぎみに外下方に大きく広がって外面に稜を作り出した脚裾部をもち、稜直下に擬凹線文を巡らすもの（第94図132）、稜下の外面に擬凹線文を巡らして区画し、その中間部に連続する「S」字状文（第95図137・139）や竹管文（同図138）を充填したものなどがある。

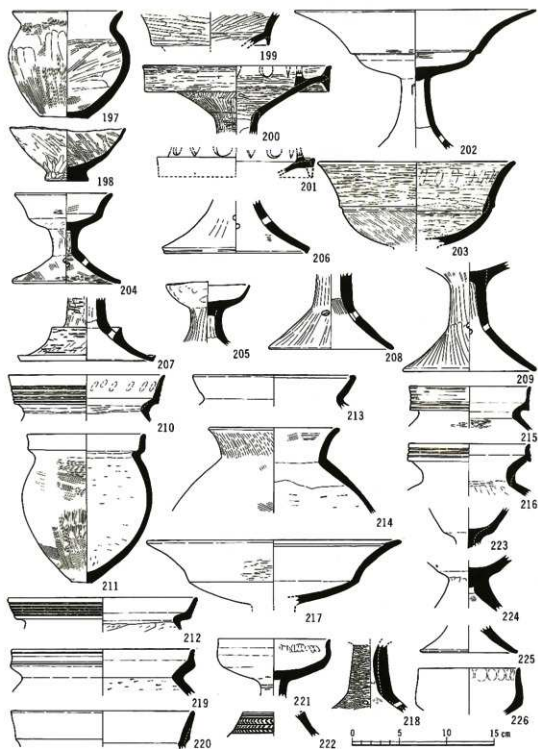
黒色土層・表土層下・9D区南端の出土品でも、甕や高坏もおおむね同様である。ただ、透かし孔を有する脚筒部から屈曲して大きく下外方に広がる脚裾部をもつ高坏（同図149）が加わる。



第96圖 低湿地出土土師器実測図1(縮尺1/4) 中層下部(150~172)



第97図 低湿地出土土師器実測図2 (縮尺1/4) 中層下部(173~182) 中層下部~上部(183~196)



第98圖 低湿地出土土師器実測圖3 (縮尺1/4) 中層下部~上部 (197~209) 中層上部 (210~218) 上層 (219~226)

d 低湿地出土土器（図版第43、第96～98図）

低湿地出土の土器数は大溝について多く、全個数の26%を占めている。

本遺構の埋土も、下層・中層・上層の3層に大別しうる。ただし、下層からの土師器の出土はなく、群集する小型の河原石とともに、中層（3～5層）のからの出土がほとんどである。まず、中層下部出土品から説明する。

甕には、やはり外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がる口縁部もち、その外面に擬凹線文を巡らすもの（第96図150～158）が過半を占める。口縁端部が薄くなる品（同図150～153、155～158）が大半であるが、端部が厚いままで終わる品（同図154）も一部混在する。なお、体部外面に叩目をもつ平底の底部（同図159）も混在する。中型品の150は容量2.3Lである。

有孔鉢には、内湾しながら外上方に立ち上がり、大溝の下層・中層出土品よりさらに小口径の口縁部もつもの（同図160・161）がある。161の容量は0.8Lである。

蓋には、緩やかに外湾しながら外下方に延びる口縁部をもつ小型のもの（同図162・163）がある。

甕には、外面に稜を形作って外反ぎみに外上方に立ち上がる口縁部もつもの（同図164～167）や、緩やかに外反しながら立ち上がるのみの口縁部もつもの（同図168・169）がある。小型品の166は容量1.0L、167は0.9L、中型品の169は3.3Lである。

碗は、外面に稜を形作って外上方に立ち上がる口縁部をもつが、小口径のもの（第97図173・175）と高坏の坏部形状と近似する大口径のもの（同図174・176）とがある。176は容量1.0Lである。

上で述べたが、高坏は大口径の碗に脚部を接続させた形をしており、坏底部から内・外面にそれぞれ稜を作って屈曲し、大きく開きながら外湾ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（同図179・180）がある。

器台には、大きく開きながら外上方に立ち上がって端部に直立する面を作り出し外面に擬凹線文を巡らすもの（同図177）や、外面に突出する稜を作り出して、大きく開きながら外湾ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつもの（同図178）とがある。

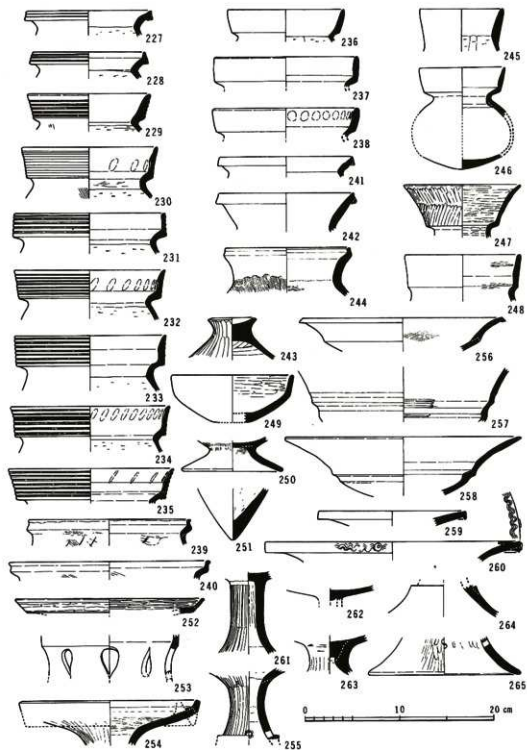
そのほか、高坏か器台か不明であるが脚部（同図181・182・195）がある。

中層下部から上部にかけての出土品では、甕には外面に稜を形作って外反しながら外上方に立ち上がり外面に擬凹線文を巡らす口縁部をもつもの（同図183）や、同様に外面に稜を形作って外反しながら外上方に立ち上がる口縁部をもつが外面が無文のもの（同図184・185）がある。やはり体部外面に叩目をもつ平底の底部（同図186）も混在する。183・185とも容量1.6Lである。

蓋には、緩やかに外湾しながら外下方に延びるやや大型の口縁部をもつもの（同図187）や、緩やかに内湾しながら外下方に延びるより小型の口縁部をもつもの（同図188）がある。

甕には、小型の体部から直線的に外上方に立ち上がる口縁部もつもの（同図189）や、頸部外面に連続斜行刺突文を施した突帯を貼り付け、直立ぎみに立ち上がって端部外面にも擬凹線文を巡らす口縁部をもつもの（同図190）、体部中位外周に突帯を巡らすもの（同図191）、

内・外面にそれぞれ稜を作って屈曲し、外上方に立ち上がる口縁部をもついわゆる小型丸底甕（同



第99圖 窪地出土土師器実測図（縮尺1/4）

図192)がある。口縁部外面には線刻の追刻文を巡らす。

台付鉢は、有孔鉢の底部に台を接合させた形であって、いわば背高で上方に立ち上がって口縁端部が内湾して終わるもの(同図193)や、それに比べて両部分とも背が低く、上方に立ち上がって口縁端部が直立するもの(同図194)がある。193・194とも容量は0.7Lである。

器台には、中層下部出土品と同形のもの(第98図199)のほか、大きく外反する器受部端に垂直面を作り出すとともに、上面に貼り付けた垂直面の器壁に交互に向きを変えた水滴形の透かし孔を巡らしたもの(同図200・201)がある。

高坏には、やはり中層下部出土品と同形のもの(同図202)のほか、口縁部の外反度が弱く坏部がより深いもの(同図203)、小型のもの(同図204・205)がある。202は容量1.3L、203は1.4L、204は0.1Lである。

中層上部や上層にかけての出土品では、甕にはより下層の出土品と同様なもの(同図210～212、219・220)のほか、大溝出土品に多い口縁端部内面が肥厚するもの(同図213)や「く」の字状に外反する口縁部をもつもの(同図214)が混じる。

高坏にも、河道下層の出土品と同様な口縁部内端面を肥厚させた坏部をもつもの(同図217)や、内湾する口縁端部が直立する坏部をもつもの(同図221)が混在する。

e 窪地出土土器(図版第43、第99図)

窪地は単なる自然遺構に過ぎないと思えるが、深さが浅い割には小型河床礫とともにかなりの量の土師器が出土しており、全個数の8.1%を占めている。

甕には、外反しながら外上方に立ち上がって端面を拡張し、その外面に2・3条の擬凹線文を巡らす口縁部をもつもの(第99図227・228)や、同様に外反しながら外上方に立ち上がって端面を拡張するが無文のもの(同図241・242)、外面に稜を形作って外反しながら外上方に立ち上がり、外面に擬凹線文を巡らす口縁部をもつもの(同図229～235)や、同様に外面に稜を形作って外反しながら外上方に立ち上がる口縁部をもつが、外面が無文のもの(同図236～238)がある。そのほか、外面に稜を形作って外上方に立ち上がり、短く直立する外湾ぎみの口縁部をもつもの(同図239・240)もある。

蓋(同図243)、壺(同図245～248)、台付鉢(同図250)、器台(同図253～255)、高坏(同図256～258、261～263)、器台ないしは高坏の脚部(同図264・265)など、既出の遺構出土品と同様である。ただし、鉢には尖底(同図251)が混在している。(中司)

2) 木器類

大溝と河道からは、容器・農具・工具・建築部材・土木部材など各種の木器が、編み物や多量の自然木、植物種子などとともに出土している。ただ、これらのうちには、その用途を特定しえない品も多い。そこで、用途不明品は、主に形態的特徴をもとに呼び分け、また、棒状木器・板材・杭状木器については、建築・土木部材のそれらと一括する。なお、主要木器の出土総数はあまり多くないので、ここでは上記の種類別に分類せず、逐次列記していく。

さて、こうして器種別に分けた主要木器の内訳は、次のとおりである。

- (1) 槽 2個 (2) 底板 1枚 (3) 箱 7枚
 (4) 匙 1本 (5) 広楸未成品 1個 (6) えぶり 1個
 (7) 横植 1本 (8) すくい網類柄 1本 (9) 柄 1本
 (10) 台形木器 1枚 (11) 小型不明木器 2個 (12) 両端部に挟りをもつ棒 1本
 (13) 有孔十字形組合木器 1本 (14) 棒状木器 112本 (15) 板材 11枚
 (16) 杭状木器 56本

以下、両遺構ごとにその出土品を報告する。ただし、今回の報告にあたっては、総数200個のうち特に主要な43個に限定し、棒状木器・板材・杭状木器のうち顕著な特徴をもたない品については省略することとした。

a 大溝出土木器（図版第44～46、第100～103図）

大溝の木器は、調査区全域に亘って出土している。中でも、特に11・12B両区、13・14D両区、14E区など、比較的集中する出土箇所が存在する。

大溝からの出土木器の総数は、81個を数える。ちなみに、容器・農具・工具など用途の判明する大部分の品は、この大溝からの出土である。

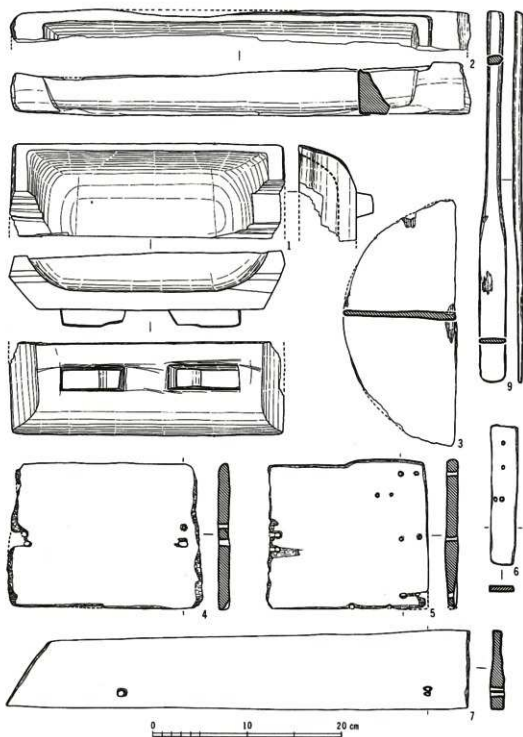
大溝の埋土は、下層・中層・上層に大別できるが、木器は全て下・中層からの出土である。さらに詳細に述べるならば、今回報告する大溝出土木器36個のうち、下層の出土品は30個、中層の出土品は2個、層位不明の出土品は4個である。

槽（図版第44-1・2、第100図1・2）大・小各1個を数える。

1は四脚付槽で、12B区溝底出土（第19図37）。器体はカマボコ形をなすが、短辺の中央で割れており、約1/2を欠失する。長さ29cm、幅9.9cm、高さ7.9cmを測る。器体は、短辺に幅1.4～1.6cm、長辺に幅0.7～0.9cmの周縁を残して、深さ4.2cm余り彫り込んでいる。内底面の両短辺には、刀子かと思える工具の刃痕をとどめる。外面の両端面には、それぞれ高さ1.5cm、同2.2cm

第3表 大溝出土木器地区別一覧表

器種 \ 地区	11B	12B	12C	13C	13D	14D	14E	15F	計
槽		1				1			2
底板								1	1
箱		1	1				2		4
匙	1								1
広楸未成品				1					1
えぶり				1					1
横植		1							1
柄	1					*			1
台形木器			1						1
小型不明木器							2		2
両端部に挟りをもつ棒			1						1
有孔十字形組合木器								1	1
棒状木器	6	2			13	6	13	2	42
板材	2	1			1		2	3	9
杭状木器	2		1	2		1	1	2	9
計	12	6	4	4	14	8	20	9	77



第100圖 大溝出土木器実測圖1 (縮尺1/4) 槽(1・2) 底板(3) 箱(4~7) 匙(9)

のやや内傾ぎみの垂直面と、高さ4.7cm、同3.5cmの斜面とを作っている。脚部は、両端面から中央部寄りに少し離して削り出している。脚部の側面形は台形をなし、高さ1.8cmを測る。脚部下面は、中央部寄りの部分で長さの1/3を削り、斜面を作る。脚基部の周囲には、やはり工具の刃痕を多くとどめる。外面の一部に焼け焦げ痕が残る。四脚付槽の既出例の多くが長さ40～50cmであるのに比べると、多少小型である。2は、厚い割板材の内部をカムボコ形に削りぬいた槽で、14 D区砂礫層上出土（第20図29）。やはり削れており、長辺の一部分のみが遺存する。長さ48.6cm、現存幅4.2cm、高さ5.5cmを測る。器表は摩耗が激しいが、一方の短辺寄りの遺存部からみて、内部は二段に彫り込んでいる。上段の深さ0.8cm、下段の深さ3.6cmを測る。全体に仕上げは粗い。

底板（図版第44-3、第100図3） 15 F区灰色砂層出土。現状は、約1/2が遺存する半円形の板である。径25.9cm、厚さ0.9cmを測る。円筒形容器、たとえば桶形容器などの底板かと思える。

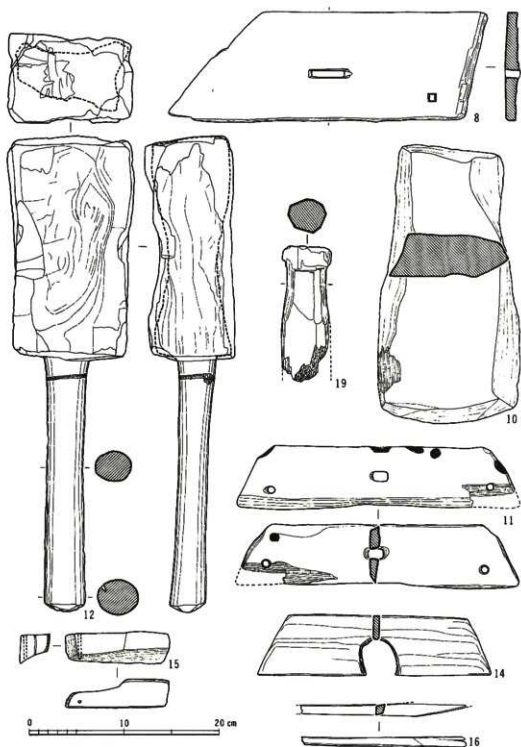
箱（図版第44-4～7、第45-8、第100図4～7、第101図8） 箱材およびそれに類する板材は5枚を数える。

4は、平面形がわずかに台形をなす箱材で、14 E区砂礫層出土（第20図31）。長さ20.6cm、高さ15.4cm、厚さ1.3cmを測る。両短辺の中央部に各2個の釘孔を、短辺に平行に穿つ。5と同一の箱材となる板である。5は、平面形がほぼ方形の箱材で、やはり14 E区砂礫層で4に東接して出土（同図32）。ただし、上辺の1/2は直線をなすが、それに続く部分でわずかに緩い曲線を描いて突出している。長さ17.2cm、最大高15.9cm、厚さ1.4cmを測る。釘孔は、一方の短辺では4と同様に中央部に短辺と平行に2個の孔を穿つが、他方の短辺では長辺と平行な配置の2個の孔を上・中・下の3段と、上・中両段の孔の間にも短辺からやや離れたより中央寄りに穿っている。また、下辺では、辺の中央と辺を四分する位置に各1個の孔を穿っている。6は、箱材の小断片か。出土箇所不明。長さ14.9cm、幅2.9cm、厚さ0.7cmを測る。4個の孔を穿っている。7は、一方の端を斜めに切断した台形の板材で、12 B区灰色砂層出土（第19図36）。長さ48.8cm、高さ8.4cm、厚さ1.6cmを測る。下辺の短辺寄りの箇所各1・2個の孔を穿っている。8は、両端辺を長辺に斜交させて切断した台形の板材で、12 C区灰色粘土層出土（同図40）。下辺長31.4cm、高さ11.7cm、厚さ1.7cmを測る。平面のほぼ中央に横長の長方形で3.5×0.7cmの、一隅に方形で0.6×0.7cmの、各1個の孔を穿っている。

匙（図版第45-9、第100図9） 1枚の細板から表裏を有する身部と柄部を削り出した匙で、11 B区砂礫層出土（第19図35）。全長39.3cm、身部長18.3cm、同幅2.8cm、柄部長21.0cm、同幅1.7cm、同厚さ1.0cmを測る。身部は、先端がしだいに薄くなるように片面だけ削っている。一方、柄部は身部との間に明瞭なさかいを作らず、しだいに幅を減じるが、基端は多少太さを増している。基端から8～17.5cmの柄の中央部は、他の部分よりわずかに細くなり、かつ丸みをおびるので、握部と思える。全体に仕上げは丁寧である。

匙の出土例では、身部に対して柄部が数倍の長さをもつものが多例を占めるのに対し、本例ではほぼ等しく、その点では比較散例が少ない。

広楕未成品（図版第45-10、第101図10） 13 C区砂礫層出土（第19図41）。長さ29.4cm、最大



第101図 大溝出土木器実測図2(縮尺1/4) 箱(8) 横槓(12) 広楸未完成品(10) えぶり(11) 台形木器(14)
小型不明木器(15・16) 棒状木器(19)

幅15.1cm、厚さ4.6cmを測る。平面形が裾広がりになる割板材のままで、未だ舟形突起も作り出していない。

えぶり(図版第45-11、第101図11) 平面形が低台形の裾広がりになるえぶりで、13C区灰色粘土層出土(第19図43)。現存幅29.2cm、高さ6.8cm、厚さ1.1cmを測る。平面のほぼ中央に長方形で1.6×1.1cmの柄壺と、その両側に凹形で各々0.8cmの柄穴を穿っている。刃部は片面から削り出している。刃部の中央は使用による磨減が激しい。両面の一部に焼け焦げ痕が残る。

横槌(図版第45-12、第101図12) 身部が四角柱をなす心持材の横槌で、12B区溝底出土(第19図38)。全長50.2cm、身部長23.6cm、同幅13.2cm、同厚さ9.3cm、柄部長26.6cm、同径3.2×3.8cmを測る。身部の平面形は、先端をやや幅広に作っている。身部の4側面のうち3面は、その中央部分が使用によって凹面をなす。一方、柄部は基端が握部より多少太さを増している。

柄(第102図13) 1本の棒の端部に、他の部材に着柄・結縛するために平面や斜めの削り込みを作り出した柄で、11B区砂と粘土の互層出土(第19図34)。全長78.3cm、頭部長9.6cm、同最大幅3.5cm、柄部長68.7cm、同径1.7×2.5cmを測る。頭部平坦面長6.0cm、同幅1.3cmを測り、着柄角度は8(あるいは172)°前後になる。全体に仕上げは丁寧である。

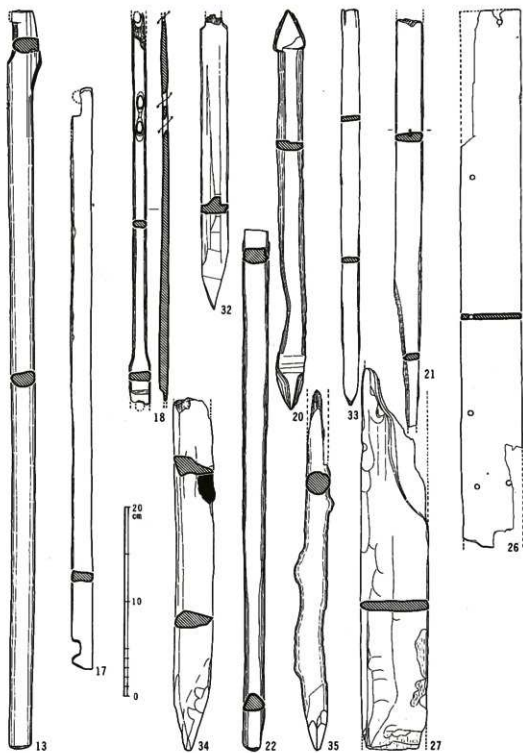
台形木器(図版第45-14、第101図14) えぶりをやや小型にした平面形が台形をなす品で、12C区砂礫層出土(第19図39)。下辺長24.7cm、高さ6.5cm、厚さ0.7cmを測る。下辺中央に幅3.4cm、高さ3.8cmの楕円形の切り込みをもっている。

小型不明木器(図版第44-15、第45-16、第101図15・16) なんらかの加工を施した小型の木器を一括する。

15は、小角柱の一端を斜めに削り落した品で、14E区溝底出土(第20図21)。長さ11.0cm、最大幅3.4cm、高さ3.0cmを測る。横断面は台形をなし、角を削って丸みをもたせた部分には横に小孔が貫通する。16は赤色顔料を塗った品の小断片で、14E区溝底出土。現存長17.4cm、最大厚1.5cmを測る。片面に斜めに稜が走る。

両端に挟りをもつ棒(図版第46-17、第102図17) 12C区砂礫層出土。長さ61.7cm、幅2.2cm、厚さ1.2cmを測る。片方の端部の一部が欠失するが、側面形が低台形をなす角棒の両端部に台形の挟りを入れている。挟りの大きさはともに1.7×0.9cmを測る。

有孔十字形組合木器(図版第45-18、第102図18) 2本の棒を十字形に組合せて用いる木器の断片で、15F区溝底出土(第20図33)。残存長41.4cmを測る。幅広の端部は、軸を挿入する孔の部分で折損したものである。つまり、本品の復原形は、この孔を中心に対称形をなす。復原孔径0.8cm、中央の長方形部の復原長約8cm、幅2.2cm、厚さ1.0cm、2本の棒の交差部となる部分の深さ0.5cmを測る。長方形部は、横断面形も長方形をなす。この長方形部分の末端からしだいにくびれて、幅1.5cm、厚さ0.8cmで横断面が隅丸長方形の棒状部へと続く。棒状部には、軸孔から28.5cm離れて1個、また1.5cmの間隔を置いて1個、さらに7.7cmの間隔を置いて1個、の計3個の孔を穿っている。これらの孔は全て表面と斜交し、かつ、孔縁に磨減痕を有する点が本品に窺える特徴である。



第102図 大溝出土木器実測図3(縮尺1/4) 柄(13) 両端部に挟りをもつ棒(17) 有孔十字形組合木器(18) 棒状木器(20～22) 板材(26・27) 杭状木器(32～35)

棒状木器（図版第45・19・20、第46・23・24、第101図19、第102図20～22、第103図23～25）棒状に加工した木器を一括する。

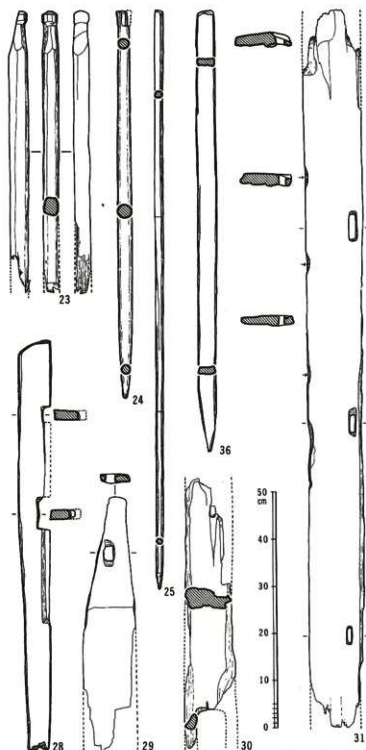
19は多角柱の基端に節を削り出した棒で、12 B 区砂礫層出土。現存長14.3cm、棒状部径5.1cmを測る。20は両端に三角形の頭部を削り出した板材で、出土箇所不明。長さ42.2cm、中間部幅2.8cm、厚さ1.1cmを測る。21は角材の断片で、15 F 区砂礫層出土。現存長43.3cm、幅2.9cm、厚さ1.0cmを測る。中央に未貫通の小孔1個を持つ。22は、横断面が不整三角形あるいは長方形の棒で、15 F 区砂礫層出土。長さ54.9cm、幅2.8cm、厚さ1.9cmを測る。23は多角柱の基端に節を削り出しその反対側は斜めに削り落した棒で、14 E 区溝底出土（第20図30）。一端が折れ損じており、現存長59.6cm、幅3.4cm、高さ4.1cmを測る。全体に仕上げは丁寧である。あるいは布巻具・経巻具であろうか。24は丸棒状に加工した品の一端を尖らせ、他端に節を削り出した棒で、11 B 区砂礫層出土（第19図33）。長さ81.9cm、径3.2cmを測る。節はわずかに欠失する。仕上げは丁寧である。25は丸みをもつ多角柱状の品の一端を尖らせた棒で、14 D 区溝底出土。長さ122.1cm、径1.5×1.9cmを測る。やはり仕上げは丁寧である。

板材（図版第45・26、第46・29・30、第102図26・27、第103図28～31）建築部材と思える板やそれに類する木器を一括する。

26は小円孔6個を穿った薄板で、15 F 区砂礫層出土。一端を欠失しており、現存長56.9cm、幅6.5cm、厚さ0.5cmを測る。表面の仕上げは丁寧である。27は割板材断片で、15 F 区砂礫層出土。両端を折損しており、現存長40.4cm、幅7.0cm、厚さ1.2cmを測る。全体に加工は粗い。28は一端に丸みをもたせて斜めに切断し、一方の長辺に2個の長方形の切り込みを入れた板で、11 B 区砂礫層出土（第19図32）。長さ87.0cm、最大幅7.0cm、厚さ2.1cmを測る。切り込みの大きさは3.3×1.6cm、7.0×2.3cmを測る。29は一端を尖らせて、その中央に長方形の孔を穿った板で、14 E 区砂礫層出土。基端が折れ損じており、現存長53.7cm、復原幅11.1cm、厚さ2.1cmを測る。孔の大きさは3.1×2.0cmを測る。30は長方形の2孔を穿った厚い割板材で、出土箇所不明。両端が折れ損じており、現存長57.1cm、復原最大幅11.0cm、厚さ4.6cmを測る。孔の大きさは2.4×1.1cm、－×6.0cmを測る。31は長方形の3孔を穿った割板材で、15 F 区溝底出土（第20図34）。両端が折れ損じており、現存長151.5cm、幅12.2cm、厚さ3.2cmを測る。長方形の3孔は一方の長辺に沿って穿っており、それぞれの大きさは5.3×1.5cm、3.7×1.1cm、3.2×1.0cmを測る。また、その反対側の長辺の3箇所には磨減痕（矢印）があって、縁部が弧状にくぼんでいる。

杭状木器（図版第45・32、第46・34～36、第102図32～35、第103図36）杭ならびに杭状に加工した木器を一括する。

32は割板材の一端を尖らせた小型の杭状品で、13 C 区砂礫層出土。基端は折れ損じており、現存長31.2cm、幅2.9cm、厚さ1.8cmを測る。基端部は両側から挟り込んでいる。33は薄い角材の一端を尖らせた小型の杭状品で、出土箇所不明。長さ41.8cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmを測る。34は割板材の一端を尖らせた小型の杭状品で、12 C 区砂礫層出土。基端は折れ損じており、現存長37.4cm、幅



第103図 大溝出土木器実測図4（縮尺1/8） 棒状木器（23～25）
板材（28～31） 杭状木器（36）

4.0cm、厚さ2.1cmを測る。
一部に焦げ痕が残る。35
は雑木の一端を尖らせた
杭で、13C区砂礫層出土。
基端は折れ損じており、現
存長38.2cm、径2.5×3.0cm
を測る。36は割板材の一
端を尖らせた杭で、14D
区砂礫層出土。長さ93.2cm、
幅4.2cm、厚さ1.9cmを測る。
先端には斧の刃痕をとどめ
る。

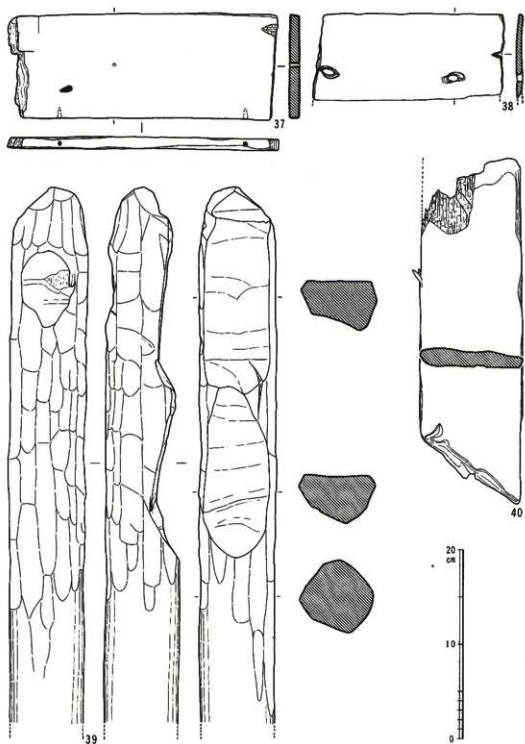
b 河道出土木器（図版
第44・46、第104・105図）

河道の木器は、9B・C
両区において、木組遺構の
周辺からその大部分が出土
している。河道内出土の
木器総数は119個を数える
が、そのほとんどは木組遺
構の杭・棒か、木組遺構に
連続する流路を変更するた
めの杭である。

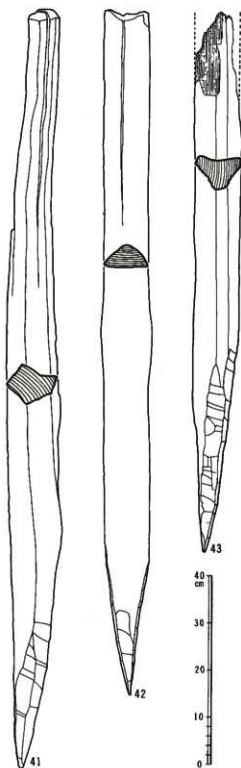
この河道の埋土は、下層・
中層・上層に大別できるが、
木器は全て下層からの出土
である。

箱（図版第44・37・38、
第104図37・38）箱材お
よびそれに類する板材は、
2枚を数える。

37は平面形が不整長方
形をなす箱材で、9C区河
底（木組遺構内）出土。長



第104図 河道出土土器実測図1 (縮尺 1/4) 箱 (37・38) すくい網類柄 (39) 板材 (40)



第105図 河遣出土木器実測図2 (縮尺1/8)
杭 (41～43)

第4表 河遣出土木器地区別一覧表

器種 / 地区	8B	8C	8D	9B	9C	9D	計
箱					2		2
すくい網 類柄					1		1
棒状木器		3	2		61	3	69
板材				1			1
杭	5	1		10	30		46
計	5	4	2	11	94	3	119

長さ28.3cm、高さ11.2cm、厚さ1.2cmを測る。平面に小円孔1個を穿つほか、下部長側面に釘孔2個を穿っており、木釘が遺存する。また、一部に焼け焦げ痕が残る。38は扁円形の2孔をもつ板材で、9C区石積遺構内出土。長さ20.0cm、幅9.3cm、厚さ0.7cmを測る。孔は一方の長辺寄りにならび、それぞれの大きさは1.1×0.7cm、1.4×0.6cmを測る。

すくい網類柄 (図版第46～39、第104図39) 直線的に伸びた丸太材で、9C区で木組遺構の横木として出土 (第24図)。長さ431.0cm、最大径8.2cmを測る。幹の太い方の端部にのみ加工を施す。この加工は、まず端部全体を多角柱状に削って整形し、その後基端から39cm前後の間に連続する2個の切り込みを、その反対側にも基端から15cm前後の間に1個の切り込みを施す。加工部分は、いずれも明瞭な斧の刃痕をとどめる。

板材 (第104図40) 摩耗のため端部が不詳であるが、現状は台形をなす割板材で、9B区河底出土。現存長36.5cm、幅11.0cm、厚さ2.0cmを測る。

杭 (図版第46～42、第105図41～43) 46本を数えるが、そのうち割材加工の3本の

杭を説明する。

41は河道出土の最長の杭で、9C区木組遺構出土（第24図）。長さ160.5cm、幅10.2×8.6cmを測る。一端の長さ約31cmを斧で削って尖らせている。また、基端は、槌で打ち込んだ痕をとどめる。42も9C区木組遺構出土（同図）。長さ145.8cm、幅10.8×4.7cmを測る。一端の長さ約32.5cmを斧で削って尖らせている。43も9C区木組遺構出土（同図）。基端が腐朽しているが、現存長113.8cm、幅10.0×7.3cmを測る。一端の長さ約52cmを斧で削って尖らせている。（中司）

3）石製品・土製品類

竪穴住居、大溝、低湿地などからは、石製品・土製品がそれぞれ若干ずつ出土している。これらは総数はあまり多くないので、出土遺構ごとではなく、一括して報告する。

さて、今回出土した石製品・土製品の内訳は次のとおりである。

- | | | | | | |
|---------|----|--------|----|--------|----|
| (1) 碧玉片 | 1個 | (2) 砥石 | 1枚 | (3) 軽石 | 3個 |
| (4) 土玉 | 2個 | | | | |

以下、各出土品を説明する。

碧玉片（第106図1） 不整の角柱状をなすいわゆる碧玉片で、竪穴住居出土（第18図12）。長さ5.0cm、幅2.2cm、厚さ1.5cm、重さ20.3gを測る。薄緑色の珪質緑色凝灰岩^②であって、玉作り工程の荒削り未成品である。

砥石（第106図2・3） 2個を数える。

2は端面が長側面に斜行する小型の仕上げ砥で、低湿地（24C区）黒色土層出土。一端が折れ損じており、現存長5.7cm、幅1.8cm、厚さ1.3cm、重さ22.0gを測る。流紋岩質凝灰岩製である。3は平面形が三角形をなす小型の中砥で、17F区出土。やはり一端が折れ損じており、現存長3.0cm、幅4.2cm、厚さ0.9cm、重さ14.0gを測る。流紋岩質凝灰岩製である。

軽石（第106図4～6） 3個を数える。

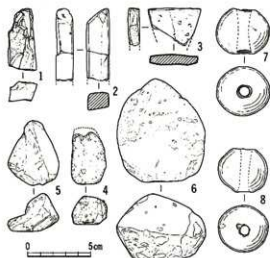
4は小型の砥石で、出土箇所不明。一端を多少欠失し、現存長4.1cm、幅2.9cm、厚さ2.3cm、重さ5.1gを測る。各面とも明確に人為的な面をなし、一部には刃痕をもとどめる。5は不整形の軽石で、大溝（14E区）灰色粘土層出土。現存長5.3cm、幅4.0cm、厚さ2.9cm、重さ7.4gを測る。ごく一部に切断面を残す。6は4・5よりは大型の不整形の軽石で、出土箇所不明。長8.2cm、幅7.0cm、厚さ5.4cm、重さ43.3gを測る。大部分が自然面であるが、一部に研磨面をもつ。

土玉（第106図7・8） いわゆる土玉は2個を数える。

7は竪穴住居出土。長さ3.6cm、径3.9×4.1cm、重さ54.1gを測る。孔径は0.7×1.1cmを測る。孔は一方から穿っている。土玉としては大型で、重い部類に属す。8は低湿地（24D区）黒色土層出土。長さ3.5cm、径3.7×4.0cm、重さ42.0gを測る。やはり大型で、重い部類に属す。（中司）

C 小結

土師器に関しては、紙幅の関係上、詳細な説明については省略せざるを得ない。次に、土器の位置づけについてごく簡略ながらも言及しておきたい。



第106図 堅穴住居・大溝・低湿地等出土土製品・土製
品実測図（縮尺1/3）碧玉片（1）砥石（2・
3）珪石（4～6）土土（7・8）

まず甕を対象にすると、大溝出土品についてはいわゆるS字状口縁甕（第89図16～18）などの東海系の品^②や、有段口縁甕（同図19、第91図46～48ほか）などの山陰系の品、さらに、一部の断片などで登載を割愛した北陸の有段口縁甕などが混在している。それでも、体部外面に叩目文をもつ甕（第92図60）とともに、その多くは口縁内端部が肥厚する甕など、畿内系の品が中心となっている。一方、河道や低湿地・窪地出土品には、ごく一部畿内系の甕（第98図213）や近江系の甕（第99図239・240）も混在しているけれども、中心となるものは北陸系の甕である。

そもそも福井平野における土師器につい

ては、未だ必ずしも十分な資料が得られているとは言えない。わずかに福井市林遺跡・同荒木遺跡・同木田遺跡など^④が主要な調査・報告例に過ぎない。それらの遺跡ではいずれも編年案も提示されており、参考になろう。

一方、石川県下における土師器については、調査・報告例もより多い。既に吉岡康暢氏によってⅠ～Ⅲ式の編年案が提唱^③されている。また、その後橋本澄夫氏によって、金沢市古府クルビ遺跡や同高島遺跡の出土品をもとに、月影式→（古府クルビ式）→高島式とする編年案が提起^⑤されている。なお、古府クルビ式土器については資料の提示例が僅少であるという憾みが残るが、以下の記述では資料数も豊富で研究も先行している、石川県下の編年に依拠することとしたい。

さて、改めて曾万布遺跡出土の土師器について概観すると、大溝からは口縁内端部が肥厚する布留式甕多数が出土しており、それらの一部には高島遺跡出土品に共通する様相が認められる。もっとも、大溝出土品は時期差を含むようで、仮に体部外面に叩目文をもつ庄内式甕を除外したとしても、たとえば布留式甕で下層の品（第89図11・12など）と上層の品（第93図82・83など）とでは、口縁部端面が水平面をなすかあるいは内傾面であるかや、器壁の厚さ如何、などの点で明らかな差が窺える。そうした差異は、S字状口縁甕・くの字状口縁甕・小型甕・高坏などでも明確で、各器種でもそれぞれ異なる様相の品が混じっている。S字状口縁甕の形状の差こそ小異ではあるが、その他の器種では形状の差も顕著で、そもそも出土層位自体が異なるので、時期差によるものと考えられる。

すなわち、下層や中層（下部）出土例では、高島式土器に先行し、庄内式併行期の様相を呈する品が多く、下層～中層（上部）や上層出土例では布留式期でも高島式土器に並行するか後続する様

相を呈する品が中心をなしている。ただ、後者には須恵器の出現時期まで降るものの存在は認めがたいので、これらの所属時期の下限はそれ以前に限定しえよう。

次に、窪地出土品については、端部が薄くなる口縁部の外面に多条の擬凹線文を巡らした有段口縁甕や尖底の鉢、いわゆる装飾器台、口縁部の大きく外反した高坏坏部や段をもつ脚裾部など、金沢市月影遺跡出土でいわゆる秋葉の月形式期の各器種が揃っている。それでも、幅狭の口縁端部に若干数の擬凹線文を巡らす甕（第99図227・228）などと同様な無文の甕（同図241・242）などは、猫橋式期に属するものであろう。これは河道出土品や低湿地出土品でも同様であるが、いわゆる月形式の様相を有する甕でも、口縁端部の器壁が厚いまままで終わるもの（同図231など）は、狭義の月形式に先行するものである。

総じて、曾万布遺跡出土の土師器は、猫橋式から高畠式直後の間の時期に属するものと言いうる。河道では出土品の過半を猫橋式が占め、低湿地や窪地では出土品の大部分が月形式で、大溝では相対的に下部の出土品に高畠式に先行する庄内式併行期、上部の出土品に高畠式期ならびに後続する時期の品の存在が顕著である。

ところで、木器についても一言及すると、横槌は4側面のうち3面はその中央部分が使用によって凹面をなしており、柄部は掘部より基端が多少太さを増しているのが特徴として指摘しうる。近年国内各地の遺跡で若干の同種の横槌が出土^⑦しているが、やはり同様に肩部側面が凹面をなしている。最近までこの種の工具を小型の杭や楔などを打ち込むさいに使用していたシベリアにおける用例などからみても、今回の出土品もまず横槌であろう。

次に有孔十字形組合木器では、棒状部に軸孔から離れて計3個の孔が存在し、これらの孔は全て表面と斜交し、かつ、孔縁に磨減痕を有している。本例はなお用途不明であるけれども、近年類例の出土が増している。既出例と比べて軸孔と最も中央部寄りの斜孔の位置が離れ、斜孔が2個一対になる感があり、各斜孔の径も大きい、などの点で若干の差異を有する。しかし、本例も、十字形に組合せて軸を中心に回転運動をさせ、製糸等何らかの作業を行う道具であろう。

さらに、すくい網類柄とした品は、本組遺構の横木として使用されていた、直線的に伸びる丸太材である。幹の太い方の一端にのみ加工を施しているが、この箇所は本組遺構の横木として不可欠なものとは考えがたい。その点で、本品は何らか別の大型品の柄を転用したものではないかという疑念が消しがたいし、そうだとすると「たも網」「さで網」など大型のすくい網類の柄が最も近似することになろう。仮にすくい網類の柄だとしても、現在もお鳥類捕獲に用いられている^⑧ので、必ずしも漁具とは限定できない。よって、狩猟・漁労具としておきたい。

なお、石製品の内堅穴住居出土の緑色凝灰岩片は、本遺跡ないしは近隣集落における古墳時代初頭の玉作りに関連する品である。以前の調査で、坂井郡坂井町河和田遺跡をはじめ、福井市木田遺跡、同・荒木遺跡などで玉作りが行われていたことが判明している。それにとどまらず、分布調査を実施した曾万布遺跡周辺部の古墳時代遺跡では、その多寡を問わず同種の断片を採集しうる。よって、専業的製作集団であるか否かを問わなければ、福井平野におけるこの時期のほとんどの集落で

玉作りに関連する作業が行われており、本遺跡の出土品はその一端を端的に示すものと言えよう。

(中司)

注

- ① 注記カードの腐朽や紛失などによる不明品である。
- ② 石材の同定は、福井大学教育学部地学教室・東 洋一氏による。以下、同様。
- ③ 同じ東海系の品に高坏（第88図10、第90図37・38、第92図69～71）なども存在する。
- ④ 大塚初重 1965 「福井市林遺跡の調査」（『考古学集刊』32）。
大西青二・沼弘・橋本幹雄 1970 「福井県荒木遺跡の調査」（『考古福井』第2号）。
福井市教育委員会 1971・1975・1976 『木田遺跡』。
- ⑤ 古岡康暢 1967 「北陸における土師器の編年」（『考古学ジャーナル』6号）。
- ⑥ 石川県教育委員会 1972 『金沢市古府クルビ遺跡』。
金沢市教育委員会 1975 『金沢市高島遺跡』。
- ⑦ 奈良国立文化財研究所 1975 『平城京左京三条二坊』。なお、シベリアの用例については、イルクーツ
ク市立博物館展示品による。
- ⑧ 今日でも、石川県加賀市かも池外周域における鴨猟では、江戸時代からの伝統的な猟法として、さで網
が使用されている。

3 平安時代

A 概要

平安時代の出土品としては、須恵器のみである。しかも、そのうち大溝・低湿地など、何らかの遺構から出土した須恵器片はわずかに12個を数えるのみであって、その他の破片はいずれも包含層から出土している。

前節で、混在する弥生土器を古墳時代に含めており、また、後述することだが、鎌倉・江戸時代に属する品を室町時代の節に含めているので、本来ならば平安時代に属する品も他節に挿入していたずらな煩雑さを避けるべきかも知れない。しかし、前後の時代との懸隔が甚だしいので、あえて独立した一節を設けることとする。

以下、簡略に説明する。

B 遺物

須恵器（第107図）

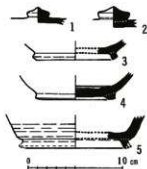
平安時代の須恵器の破片総数は、63個を数える。ただし、いずれも小破片である。上述のように、遺構出土の須恵器片は12個あるが、その大部分は後世の混入であり、かつ、図示に堪えない。したがって、全て一括して説明する。

坏壺（第107図1・2） 蓋およびそれに類する破片は3個を数える。

1・2は蓋坏のつまみの部分である。ともに低湿地（24B区表土層下）出土。1は、つまみ部の径2.5cm、現存高1.8cmを測る。2は1より多少大きく、つまみ部の径3.4cm、現存高2.2cmを測る。

坏（第107図3・4） 坏およびそれに類する破片は31個を数える。

3～5は高台をもつ坏である。3は12C・D区出土。復原底径14.1cm、現存高2.1cmを測る。4は13C区出土。底径8.4cm、現存高2.8cmを測る。5は低湿地（24B区表土層下）出土。復原底径17.0cm、現存高3.6cmを測る。



第107図 低湿地等出土須恵器
実測図（縮尺1/4）
低湿地（1・2・5）
12C区（3） 13C区（4）

C 小結

上述のように、平安時代の出土品は、個数も少なく、大部分は後世の混入であって、学問的には大きな意義を有しているとはいいがたい。したがって、言及は省略したい。ただ、福井平野における集落遺跡の分布では、弥生（後期）～古墳時代（前期）・室町時代（後期）の2時期とともに、奈良～平安時代の遺物の散布地がきわめて多く、顕著な存在であることが判明している。その点では、本遺跡も当地方の一般的な傾向に大きくは背反してはいないことが窺える。（中司）

4 室町時代

A 概要

室町時代の出土品としては、土器類と木器・石製品・金属器・土製品、自然木・植物種子などの類がある。それらのうち主要な品は、その大部分が井戸・溜井・墓塚などからなる38基の土壌から、それぞれ少数ずつ出土している。各土壌ごとの出土品の種類や個数については、既に遺構で説明しており、改めて記述するのは煩雑になるので、当時代の遺物については種類ごとに一括して記述することとしたい。

なお、そのほか、若干の鎌倉・江戸両時代の遺物も混在しているが、該当する時代の遺構が存在しないので、本節に含めることとする。

B 遺物

1) 土器類

土器類には、土師質土器、瓦質陶器、越前焼、珠洲焼、瀬戸・美濃焼、東播磨系陶器、伊万里焼、唐津焼、中国製陶磁器と、産地不明の陶磁器などがある^①。ただ、その大部分は小断片であるので、種類別の個数は判明するもののみ記述する。もっとも、瓦質陶器、珠洲焼、唐津焼については、断片数がきわめてわずかであるので、説明を省略する。

土師質土器（図版第47、第108図）

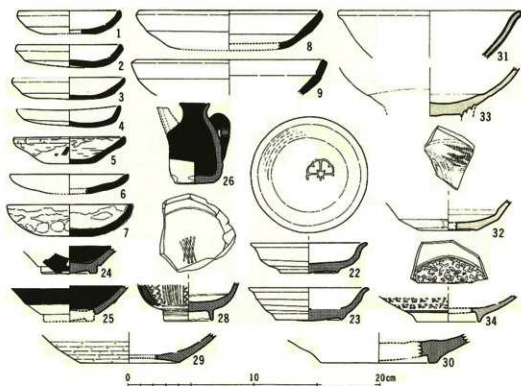
土師質土器は小皿4個、小皿・皿断片の109個を数える。

小皿（図版第47-1~7、第108図1~7） 小皿は、調整の全殻が判明する例が必ずしも多くはないが、器形や調整からA~Fの6類に分けうる^②。

A類（1~3）は、見込みを一方方向のナデ調整した後、口縁部内外面に親指と人差し指とをあてて時計回りで回転ナデ調整した品で、口縁部は底部とのさかいの外面に稜を形作り、短く内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は直立する。B類（4）は、肘あて成形した口縁部内外面を回転ナデ調整したと思える品で、口縁部はやはり底部とのさかいの外面に稜を形作り、短く上外方に立ち上がる。C類（5）は、口縁部内外面を回転ナデ調整したと思える品で、口縁部は外面に稜を形作らず外湾ぎみに伸びた後、端部が直立する。D類（7）も口縁部内外面を回転ナデ調整した品であるが、底部が明確さを欠き、側面も弧状をなす。E類（6）も口縁部内外面を回転ナデ調整した品であるが、底部がさらに丸みをおび、かつ、器高が低い。F類はE類に類似するが、水筒した白色粘土を用いて薄く仕上げている。

以上の小皿のうち、C・D・F類の大部分の品は口縁部に油煙痕の付着があり、燈明皿である。総じて口径は、二寸五分から三寸五分の間に位置するが、大部分の品が三寸である。A類は朝倉氏遺跡出土の小皿分類^③のD₂類、B~D類は同C₂類、F類はE類に相当しょう。F類が時期的に最も遅れるものと思える。なおそれぞれの詳細については、第5表を参照されたい。

皿（図版第47-8・9、第108図8・9） 皿には完形品がないが、小皿A類より大型品で、口径は五寸である。おそらく盛り皿として用いられたものであろう。



第108図 各土壺・包含層出土土師質土器、陶磁器実測図(縮尺1/3) 土師質土器小皿(1～7) 同皿(8・9) 瀬戸・美濃焼灰釉小皿(22・23) 同天目茶碗(24・25) 同水注(26) 伊万里焼染付茶碗(28) 不明国産陶器鉢(29・30) 中国製青磁碗(31・32) 同白磁碗(33) 同染付碗(34)

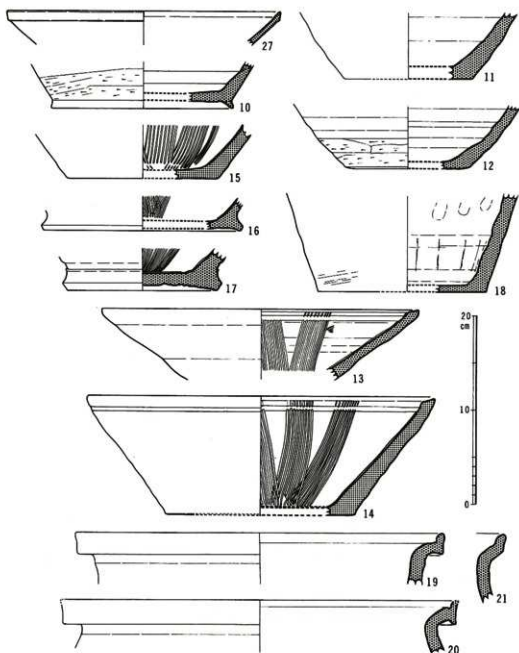
そのほか、それぞれの詳細については、第5表を参照されたい。

越前焼(図版第48、第109図)

越前焼は、こね鉢片など55個、スリ鉢片28個、甕片51個を数える。

こね鉢(第109図10～12) 10はこね鉢下部で、14 E区表土層出土。底径19.4cm、現存高4.8cmを測る。高台は付け高台で、体部内面はヨコナデ調整、同外面はへら削りである。内面には輪積み痕を残し、磨滅がある。11もこね鉢下部で、9 B区表土層出土。底径13.6cm、現存高7.0cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整である。12もこね鉢下部で、9 D区出土。底径13.4cm、現存高6.7cmを測る。体部外面下部と底部下面はへら削りであるが、その他はヨコナデ調整である。内面には磨滅がある。こね鉢のうち11は、時期的に後出すると思える。

スリ鉢(図版第48-13～15・17、第109図13～17) 13はスリ鉢上部で、15 F区出土。口径33.7cm、現存高7.5cmを測る。口縁端部は内傾し、その下位の内面には幅広の沈線1条をもつ。内外面ともヨコナデ調整し、1単位9条の櫛目を粗く施している。14は器形の3/4を欠失するスリ鉢で、34号土壺底出土(第70図4)。口径36.6cm、底径20.0cm、器高12.6cmを測る。やはり口縁端部は内傾し、その下位の内外両面には幅広の沈線各1条をもつ。13と同様に内外面ともヨコナデ調整し、



第109図 各土層・包含層出土陶器実測図(縮尺1/4) 越前焼こね鉢(10～12) 同スリ鉢(13～17) 同鉢(18) 同甕(19～21) 束横系こね鉢(27)

1単位9条の櫛目を粗く施している。15はスリ鉢下部で、15号土層中層出土(第50図1)。底径16.7cm、現存高5.6cmを測る。櫛目は1単位9条である。外面はヨコナデ調整である。火熱を受け、外面